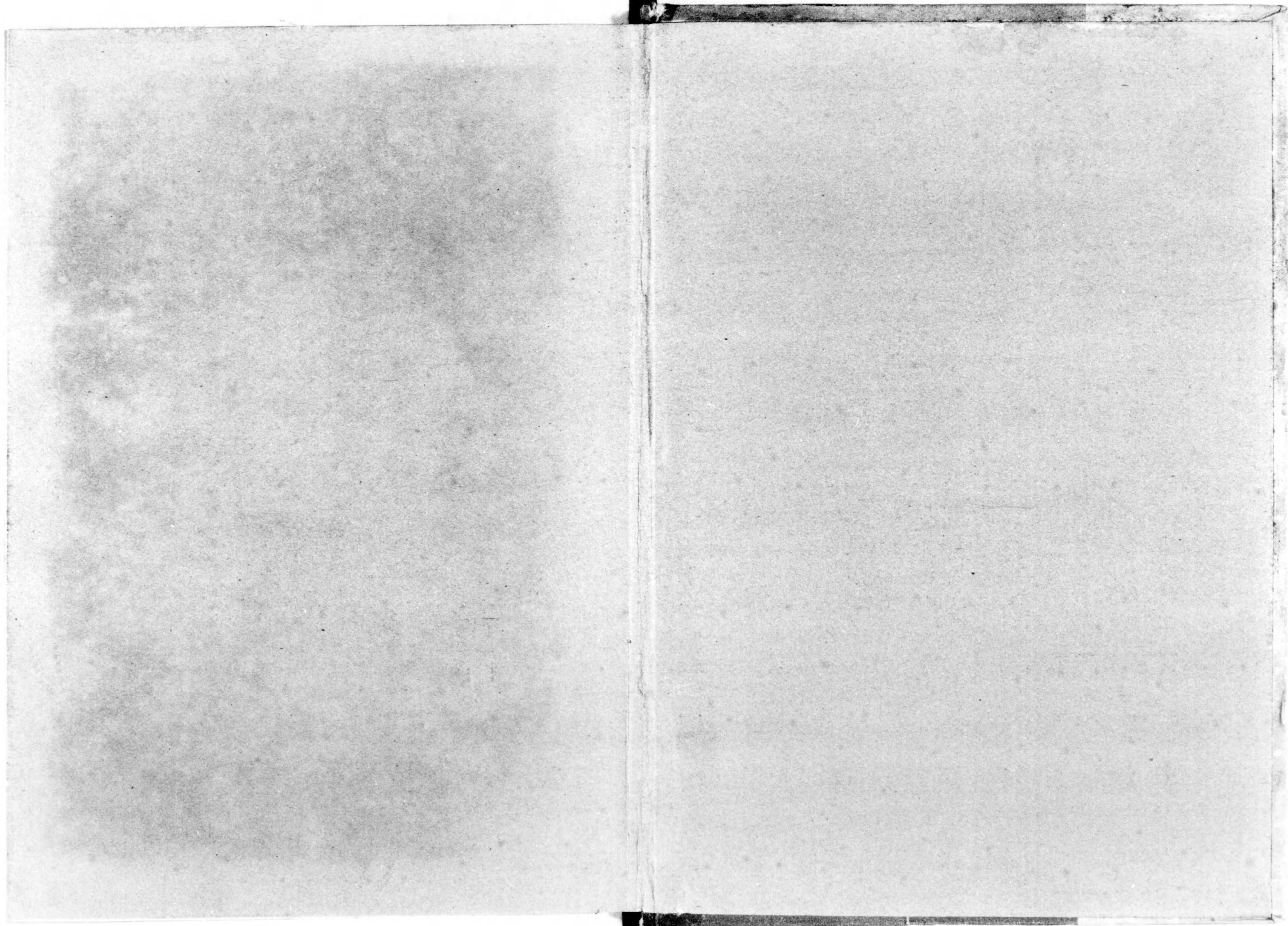
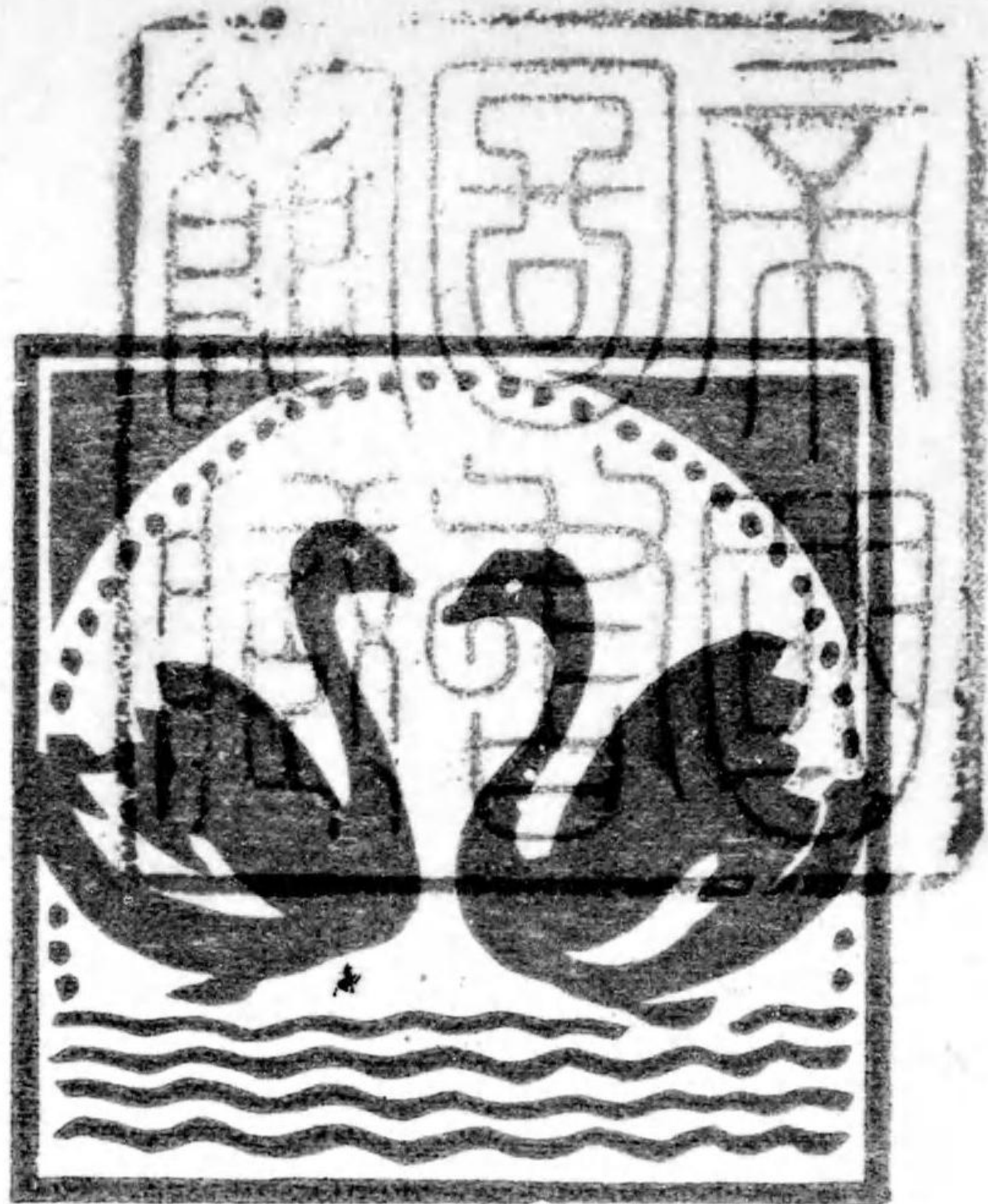


始







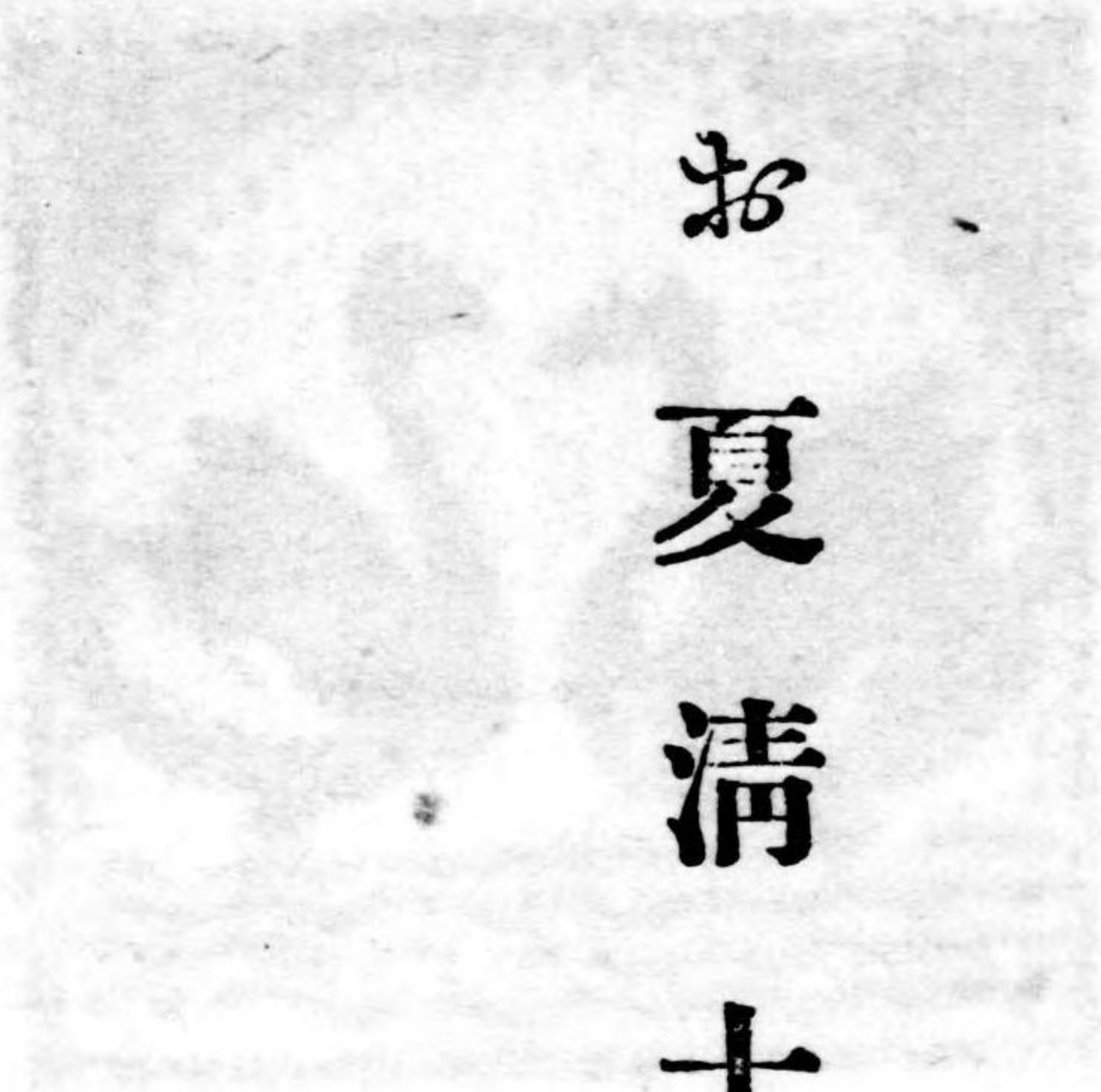
お夏清干郎

大正
7.5 4
内交

東京
三陽堂

持101
574

お
夏
清
十
郎



お夏清十郎

お夏清十郎

其日、清十郎は目の眩むほど多忙かつた。
毎年秋の收穫時になると、但馬屋の店は近郷近在のお百姓で市の立つのが例であつた、今年は米の値が好い所爲でもあらうが、水上谷内は云ふまでもなく、福住、船津のやうな遠方から駄馬へ俵を附けてドン／＼押しかけて來るので、常雇の手代や丁稚では迎へ手が

廻り切れなかつた、それで十日ばかり前から四五人の手傳まで置いてある。

でも仍且清十郎は多忙かつた。

朝飯が濟んで、店の大火鉢の前で一ト休みする間もなく、四斗俵や五斗俵を脊負つた男が三人五人と押しかけて来て、清十郎を追ひ立てるやうに促した。

「清さん、頼みます、今日は内に客があるので、それでこないに早う出て来たのや、手を合せて拜みます」

「私かて爾や、今日は飾磨へ廻らんならん用事があつて、昨夜の間に俵を拵えて出て来たんや、助ける思ふてな、清さん」

百姓は右からも左からも急ぎ立てた。同量役の勘十郎は店の間で小楊枝を使つて居た。

「私にばかり云はずに、勘さんにも頼んだら何うや」

清十郎は立ちかけて云つた。

「それがなア」

百姓は眼と眼を見合せて頷き合つた、勘十郎には柵目を盗まれるといふ評判が村一杯に廣がつて居た、その事は清十郎も聞いて居て但馬屋の信用に關はると、人知れず胸を痛めて居るのであつた。

「爾云はんと頼みます清さん」

百姓は店の軒下へ蓆を敷いたりした。清十郎は厚衣に帆前垂を締めて、柵と斗搔を提げながら蓆の端へ陣取つた、糲殻を脱いだまゝの玄米が山のやうに眼前へ盛られて、賣手の百姓が見る間に二三重の人垣を築いた。

「一ト一つ、二タ一つ、三イーつ……」

一升櫛せうすで米こめの山やまを端はしから崩くづして行く、右手みぎてに置おいた斗桶とけが一杯はいになるなりと、手傳てつたひや丁稚ていぢが空桶あきをけと置おき替かえて行いつた。

『四斗七合』

最後さいごの半端はんぱを目分量めぶんりやうで定きめて、清十郎せいじちやうが聲高こゑたかに云いふと後方うしろに立たつて居ゐた手代てだいが附木つぎに四斗七合ごぶと書かき入いれて賣手うりての百姓せうに渡わたす、百姓せうは満悦まんたつの面持おももちで其附木そのつぎを押戴おしいたき、帖場てうばへ走はしつて銀子かねと替かえると清十郎せいじちやうに聲こゑをかけてさつさと往いつて了しまふ。

『清さん、大きに』

『清さん、御免なさい』

『清さん、有難うがした』

財布さいふを膨ふくらませた百姓せうが九人にんも十人にんも歸かへつて行いつたが、清十郎せいじちやうの前まへへは後あとから後あとから米こめの山やまが築きづかれて、午下りひるさがまで一寸ちよつこも手てが休やすめ

なかつた。

『清さん、まだ手が空きまへんか』

下女げぢよのお玉たまが三度目さんだめの案内あんないに來きた頃ころには、書役かきやくの手代てだいは代りかへの者ものから矢立やたてを受取うけとつて、噫おきびをしながら藁苺わらしちで前齒まへはをせ、つて居ゐた。

『幸さん、食つて來ましたか』

清十郎せいじちやうが訊きくと、書役かきやくの幸吉かうきちは面目めんぼくなさうに叩頭たたきして、

『お先へ、清さんもう八ッだつせ』

辯疏いひわけらしく云いつて附木つぎの數かずを讀よんで居ゐた。其處そこへ主人あるじの九左衛門くざゑもんが見廻みまはりに來きた。

『幸吉、飯は濟んだか』

『へい、今戴いまたきました』

『清十郎は濟んだか』

二杯目の榼へ斗搔を入れかけた清十郎は何心なく振り回つて、
「まだですが、序に片を付けてからにいたします」
「さうか」

九左衛門は黙つて其處に立つて居た。

二

清十郎の榼の使ひ方は姫路の城下でも評判であつた、賣手に充分
の満足を與えさせて、それで買手に相當の榼目が出た、榼の持ち工
合、斗搔の搔き方、それこそ真似の出来ないほど巧妙なものであつ
た。

「十一の時から仕込んだ甲斐がある」

と主人の九左衛門は何時も爾思つて鼻を高くした、實際城下で但
馬屋の評判の好いのは清十郎が居るからであつた。

「巧いものだ」

九左衛門は首を捻りながら五斗の玄米が悉皆庭藏へ運び込まれて
席の上に一勺足らずの米粒が塵埃雜りに残されるまで、吾を忘れて
恍れて居た。

「五斗九合」

聲高に云つて幸吉に附木へ書き留めさせると、清十郎は更に次の
米山を待ち受けて居た。九左衛門は見兼ねて清十郎を呼びかけた。

「清十郎、飯が濟んでからにせい、爾う働いて呉れては軀が續くも
のでない」

「はい」

「お客様も大分減つたやうな、其間勘十郎に手傳はせて置く」
店の方を見込んで、

「勘十や、勘十や」

勘十郎が聲に應じて出て来た。

「おう、勘十郎、お前は何うしたものぢや、あれほど云ひ聞かせてあるのに火鉢の椽へ嚙り付いて居るといふ法があるか」

「清さんが居りますから、私は構はん方が好からうと思ひまして」

「清十郎は清十郎、お前はお前ぢや、軒下は此通り空いて居る、蓆を敷かせて二ヶ所で買ひ込めば、一日かゝるものなら半日で済むお客様も我家も双方の便宜であるからと前以て云ひ渡してある筈ぢや」

「へい」

「私のいふことを何處へ聞いて居なさる」

「……………」

「何から何まで年下の清十郎にさせて、それでお前の役日が立つと思ふか」

「へい」

「年甲斐もない、些と氣を付けるが好い」

「へい」

「へいではない、此大勢のお客様がお前の目には見えんか」

「……………」

「清十郎はまだ晝餉も済めずに働いて居る、お前が精を出すのは食ふ時と飲む時だけぢや、横着者め」

居合すものは哄と笑つた、勘十郎は俯向けた顔を火のやうに赤らめて居た。

「旦那さん」

清十郎が見兼ねて、

「勘さんは決して横着で何うといふ譯ではございません、今日のこところは私に免じて御勘辨を願ひます」

「清十郎が爾云へば重ねては云はんが、年上の者が年下の者に詫びて貰はにやならんとは、勘十郎、耻かしうはないか」

「旦那さん、もう、もう宜しうございます」

清十郎が口を塞げたいほどに氣を振んで、

「買ひ込みの方は私と勘さんと二人で引き受けますから、今日のこところは此儘」

頭を下げて詫び入るので九左衛門は云ひたいことを止めて奥へ入つた、それを機會に後を勘十郎に頼んで置いて、清十郎が勝手元へ行きかけると、誰やら背後から呼び止める者があつた。

「清さん、私ぢや、水間の種吉ぢや」

「おう、お前は種さんか」

清十郎は懐しく後戻りをした、和泉の水間は清十郎の郷里で、種吉は同村の百姓であつた。二人は久濶の挨拶を交して、

「あまり立派になつて居るので、清さん、私は見違えましたよ」

「朝から晩まで糟塗れになつて、あまり立派でもありませんまい」
「いや、二三年見ぬ間にころつと變つた、色は白し、目鼻は揃つて居るし、水間の近在では、まあ二人とない男振ぢや」
「そんな追従は止めにしてお呉れ、それより種さん、晝飯はまだであらう」

「疾の昔に茶を貰ふて食べた、お玉さんとかいふ女中さんが、それはく好くして呉れてな、清さんの處へ来た人ならと、お下物まで内密で呉れたと思ひなさい、これも清さんの男振のお蔭ぢや」
「そして此地へは、何か用でもあつて」

「さうとも、さうとも、お前さんに大事な用事があつて来た」
「それでは此處で立話も出来まい、種さん此方へ来て下さい」
清十郎は裏庭の土藏の蔭へ呼び入れ、

「そして用事といふのは？」

「用事といふのは、まあこれを見て貰ふ」
頸に括り付けた小風呂敷包を解いて、中から一通の手紙を出して渡した。

「これは妹のお俊から」

「假初のことではあらうが、何といふても人間は生身ぢやでな」
云つて種吉は其處に蹲踞んで、雁首の菱げた煙管を横啜えに、燈石をかちく云はせて居た。

清十郎は妹の消息——それは無論お寺の住持か、氏神の神主か、代筆したのではあらうが——を讀み行く間に顔の色まで變つて、幾度も宙を覗めては長い太息を吐いた。
種吉は煙を吹きく下から見上げて、

「お店の多忙いところを御無理ではあらうが、外ならん親の大病ぢや、何とか好いやうに願ひしてな、清十郎が云ひ憎いやうであれば、あんたから御主人へ云ふてやつて呉れと病人から懇々頼まれて来た、掛替のない唯一人の父親ぢや、言ひ遺したいこともあらうで是が非でも臨終に遭ふた方が可からう」

「私も遭ひたい……………」

清十郎は手紙で眈を拭き、

「何と云つても今か多忙い絶頂、旦那が暇を下さるか何うか……………」

「お前さんで下さらんやうなら、私からも頼んで進せやうよ」

「それにま……………」

氣になるのはお夏のことであつた。種吉は聞き咎め、
「外に何ぞ故障でもあるのか」

「といふ譯でもないけれど……………嗚呼、何うしたものであらう」

云つて、清十郎は手紙を胸に抱いて目を瞑つた。種吉は蓑入を腰に挟して立ち上り、

「どんなことがあらうと清さん、世の中で親の臨終ほど大事はない筈ぢや」

「それはもう……………唯一人の父親、云はれるまでもなく遭ひたうてなりません」

「さうなうてはならん筈ぢや、別けても後にはお俊さん一人ぢやでな」

「妹は一人で血迷ふて居ませう」

「血迷ふより、お前の飯省を待ち兼ねて居やう、恁ういふ間も氣が、いな、清さん、直ぐにも旦那に願ひしたら好からう」

四

旦那へお願いする意で、清十郎が母屋の庭前をうろくして居たのはそれから間のないことであつた。

戦場のやうな店前の騒々しさとは、別世界かと思ふほど四邊が閑寂して居た、チ、と鳴く雀の音を聞きながら、清十郎はお庭門を出たり入つたりした。

何う考へても此多忙い際が氣になつてならなかつた、今も今とて勘十郎に代つて貰つて居るのである、此ま、郷里へ行けば朋輩へも濟まず、旦那へも義理が立たない、折角繋いで来た信用か、此一段

で滅茶々々になるやうにも思へた。

と云つて外ならぬ親の大事である、この方も捨て、置ける道でなかつた。

『お願いしやう』

決心して門を入りは入つたもの、何だかお店の多忙さに附け込んで無理難題を持ちかけるやうで、足が鉛のやうに重かつた。

『何で閑の時に病氣をして呉れんのであらう』
と、大病の父親が怨めしくも思へた。

けれど此ま、親の死目を他所には見て居れない。

『仍且お願いしやう』

清十郎は飛石傳ひに座敷の方へ進み寄つた、秋の日光はお庭一杯に向つて、霜に燃えた楓の影が繪のやうに沓脱石の上へ落ちて居る

それを見るときもなく見詰めながら、清十郎はお夏のことを考えて居た。

郷里へ行くなら一ト目逢つて行きたい、薄々聞いた龍野との縁談も氣になる、一昨夜から積る咄が山ほど溜つて居る、云ふだけのことは云ひ、聞いただけのことは聞いた上で三日でも五日でも離れて居たい……。

とは云へ、一方は主人の娘、一方は奉公人、三つでも年上であつて見れば何方へ轉んでも罪は此方にある、假し手出は先方からしたにもせよ、主人の娘を唆かした罪名は免がれない、此事が知れたら父の臨終の障りにもならう、龍野から養子を娶るなら娶れ、此方は是れを機會に全然に諦めて、郷里へ行つたら生れ變つて出て來やう……。

爾も思つたが仍且諦められなかつた。

お願ひしやうか、止めて置かうか。

止める譯に行かんとあれば、嬢さんに一度逢つてからにしやうか……。

「清さん」

不意に後方から脊中を叩かれて、清十郎は悸然として振り回つた「あんた、まあ、何時まで待たしなはるのや、お茶もお汁も冷えて了ひますがな」
それは下女のお玉であつた。

「私は欲しない」

清十郎は横を向いた、腹の虫はぐうぐう鳴つて居ながら、御飯が咽喉を越しさうにもなかつた。

『それなら爾と云ふて呉れはつたら好いのに、妾はまたお腹が空いて居やうと思ふて店から店前、庭から庭藏、裏の土藏一つ残らず探しました』

『食べやうと思ふたけれど、俄に氣になることが出来て』
清十郎は俯向きながら云つた、お玉は可愛さうに側へ寄つて、何やら囁きかけた時座敷の障子が颯と開いて、九左衛門が眼鏡越しに
ぢろりと此方を睨んだ。

お玉は逃げ出し、清十郎は椽近く進み寄つた。

五

『清十郎はまだ飯を濟ませんのか』

九左衛門は眼鏡を脱して帳面上へ載せながら云つた、座敷の十疊の間を九左衛門の帳場にして居るのであつた。

『はい、水間から熊人が参りましたので』

清十郎は椽臺に臀の端を掛けて云つた、両手を支いた椽が鏡のやうに澤々して居た。

『水間から熊人が来た？』

九左衛門は不審の眉を寄せて、

『郷里に何か起つたのか』

『父が大病で今日明日が持てんと』

懷中から手紙を引き出して、

『妹からの便でございます』

片袖で眼を拭き、帳面の上に差し出した。九左衛門は折角脱した眼鏡を更に掛け直して、遠目に手紙を読み初めた。

と、袖垣の外の離座敷の障子が、スーツと音もなく開いて十七八の、色の白い、丸ぼちやの可愛い女の顔が浮き出るやうに現はれて派手な小袖で障子の親骨を持ち添えながら、素足を爪立て、垣越しに密と母屋の椽を覗いた。

お夏であつた。

『ほう、これで見ると佐治右衛門は大病らしい、今日明日が知れんとしてあるの』

九左衛門は手紙と眼鏡を擱いて云つた。清十郎は俯向いたまゝ、

『はい』

濕つた聲であつた。

『それで何うするといふのぢや』

『はい』

『はいでは分らんが、親里へ遣つて欲しいとでも云ふのか』

『お店のお多忙い時でございますから……』

『店は知つて居る通り一寸も手が放せん』

『それを存じて居りますので……』

『分けてもお前が居いでは、買ひ込は見合すより外に手が無い』

『それでは、それでは私が……』

『お前も困るか知らんが私の宅でも困る、外季とちがうて、今が收穫時ぢやでの』

『御尤もで』

『清十郎』

「はい」

「此處はお前の心一つぢやが、何うであらうか、今日明日が持てんといふ病人の處へ、今から駆け付けて臨終に間に遇ふぢやるか」

「……………」

「飾磨から船に乗つて、堺か岸和田かへ着けて、それからまだ何里か陸を歩かにならん、何れほど急いでも二日は費る、それに向ふから使者の來たのが二日、都合四日費えて其れで病人に息があるやうなら最う占たものぢや、十日や二十日で死にはせん」

「……………」

「死ぬものならもう死んで居る、お前が水間へ行き着いた頃には、葬式も出した後ぐらゐなものぢやろ」

「私も爾と思はんでもございません」

「お前も爾思ふぢやろ、誰でも狙ひは同一ことぢや、何うせ臨終に

も遭えず葬式の間にも合はんとすれば、店の多忙いところを見込んで水間へ往かずとものことであらう、と思ふが何うぢやな」

黙つて居る。

「それとも、店は何うならうと水間へ往きたいと云ふのか」

俯向いたまゝ黙つて居る。

「お主より親が大事と云ふのか」

それでも清十郎は返事をしなかつた、拭き込んだ椽に自分の顔が映つて居る、それを見詰めて居る間に兩眼が曇つて何那に瞬叩いても曇が脱れない、手で拭くのは知つて居るがそれでは泣いて居ると思はれるのも辛い、腕と睫毛で支えて居る間に涙がポトリと椽の上へ落ちた。續いて二滴、三滴。

「清十郎、泣いて居るのか」
清十郎ははつと思つて横を向いた、袖垣の蔭ではお夏が襦袢の袖口で臍を押へて居た。

六

「泣くほど行きたいなら行くも可からう」

九左衛門は氣色ばむで云つた。

「いえ、爾いふ譯では……」

清十郎は慌て、辨疏をしようとしたが、何故か胸が詰つて口が利けなかつた。涙を見られぬやうに手の甲で拭き〜、

「誰も、な、泣いては……」

「爾いふ口の下から泣いて居るではないか、涙を私に見せ付けるのは、無慈悲な旦那様と私を怨んで居るからぢや、此歳になつて他人に怨みは買ひとむない、さア行つて呉れ、今からでも行くが好い」

九左衛門はそわ〜と立つたり座つたりしながら、

「店の方は何うならうと儘ぢや、清十郎、それほど行きたいものを止め立てはせん、私に構はず、行くものなら行くが好い」

「参りません……ま、参りません」

清十郎は強く首を掉つた、行かないといふ決心を見せる意であつたが、涙が意地悪く後から後から零れ落ちた。

「行かんといふて」

九左衛門は座り直した、多少沈着いた様子で清十郎を見直したが
零れ落ちる涙を見るとまた焦躁した氣になつて、

『いや行け、何といふても行け。今私に義理立てをして貰ふても、
後で何時までも怨まれるのが辛い』

『ま、参りません……』

『それは口頭だけぢや、行きたいのが腹一杯であることは私の目に
はちやーんと分つて居る、その代り清十郎』

九左衛門は誰に向いて云つてるのか譯の分らぬほど、右を向いた
り、左を向いたりして、

『行くのは好いが、私から路、路、路銀は出せん』

立ち上つて店の方へ行きかけたと思ふと、また後戻りをして、

『源十にでも頼めば、二朱銀の一枚ぐらゐる出んこともあるまい、行

くとも行かんとも、お前の……』

後は口の内で消えて清十郎には聞えなかつた。

『旦那さん』

清十郎が顔を擡げた頃には、九左衛門はもう其邊には居なかつた

『あ、何うしたものであらう』

右手を内懐に挟し込んで、吐息と共に落膽したやうに首垂れて居
た、主人を氣拙くさせたのが挽回の付かぬ身の破滅のやうにも思え
た。

雀が庭の松枝に止つて、チ、チ、と囁り初める、秋日は大分斜
に傾いで、清十郎の胸の邊へ廂の影を投げて居た、白い障子紙が椽
臺に倒さに映つて居る。

と、廊椽に華やかなお夏の姿が浮き出て、人目を忍びながら静に

静しづかに歩あゆみ寄よつた。

清十郎せいじゅうろうは少しも氣付きづかなかつた。

『清十郎』

細ほそい微かすかな聲こゑでお夏なつは呼よんで見みた、清十郎せいじゅうろうは仍やう且はり氣付きづかずに居ゐた。

『清十郎』

二度目にどめに呼よんだ時ときは、お夏なつはもう直ちやう背しやう後ごに立たつて居ゐた。

清十郎せいじゅうろうは突つと顔かほを擡あげて、聲こゑの出でどころを索さがすやうに、眼元めもとをき

よとくさせて居ゐたが、背うしろ後ごのお夏なつには少しも氣付きづかなかつた。黙だま

つて、胸むねを抱だいて、袖垣そでがきの方ほうを尻しつと瞋みづめる。

お夏なつは膝ひざを支ついて片手かたてを男おとこの膝ひざへ載のせた。

『清十郎』

お夏なつは三度さんど呼よんだ。清十郎せいじゅうろうははッとして身みを斜ひしに捻ひねつたが、夫それれと見みると肩かたで吻くちと息いきを吐ついた。

『おう、お夏さん』

膝ひざに載のつて居ゐるお夏なつの手てを、清十郎せいじゅうろうは四邊あたりに眼めを配くはりながら抱だくやうに持もち上げて、

『何時いつの間まにお來いでになりました』

『今』

お夏なつは沈しづんだ調子てうしで云いつた。

「これでは、私が旦那さんにお願ひして居たことをお聞きになりましたか」

「聞いた、そなたは水間へ行きたいのやろ？」

「行きたいといふ譯では……」

「誰でも行きたい、私かて、親の死目には逢ひたい」

「逢ひたうても、此頃のやうにお店が多忙うては」

「それは大事な、妾から父さんに味よう云ふて上げる」

「でも、それがために」

清十郎は四邊を見回り

「誰も居はいたしませんか」

「皆、店に居やる」

念のために座敷だけ覗いて、

「誰に見られても構はぬ、私はもう覺悟して居るもの」

清十郎は聞き捨てならぬと云ひさうな顔をした。

「何う覺悟なさいました」

「そなたとの仲が知れたら、父さんに頼んで見る」

「何といふて」

「そなたと夫婦になれるやうに」

「そ、そんなことを……」

膝と膝を突き合せ、

「それこそ貴女は酷い目にお遇ひなさる」

「何のやうな目に遇ふても大事ない」

「そ、そして、旦那様が夫婦にして下さると思つてお居でになりますか」

「さうは思はぬが」

男の顔を上目に見て、

「死ぬ覺悟で居れば、夫婦になれまいものでもあるまい」

「死ぬ覺悟で」

清十郎は眼を睜つた。お夏は兩手とも男の膝に載せて、

「清十郎、そなたは命が惜しいやろ？」

「唯捨てる命は、惜しいとも思ひますが」

お夏を惚々と偷み見て、

「あなたと一緒になら」

「妾と一緒になら死んでたもる？」

「一人生残る位なら、死んだ方が何れほど樂か知れません」

「屹度？」

清十郎は強く頷いた。二人の手は何時の間にか精一杯握り締められて居た。

「はア嬉しい」

お夏は吻として云つた。

「それ聞いて肩の重荷が卸りた、勘十が何のやうな企みをしやうと」

龍野の縁談が何れほど進まうと」

「勘十郎が何とか申しましたか」

「此間、二番の土藏で會ふたやろ」

「旦那がお寺詣りの日に」

「あの時、長松が米俵の蔭で、鼠捕りの罾をかけて居たさうな」

「お店の長松か？、道理で、私の顔を見ては、薄氣味の悪い笑い方をすると思ひました」

「その長松が、有ること無いこと、不殘勘十に告口しやつたと」

「悪い者に……」

親の大病であることも忘れて、清十郎は、甘い戀に酔はされてゐた。

「以前から勘十は、私に何して居た」

お夏は不快な追憶に眉根を寄せた。

「その勘十が、そなたとの仲を知つたのやもの、何のやうな邪魔立するか知れたものではない」

「勘十の聞いたことが好く知れましたな」

「それはこれに書いてあるもの」

袂から勘十郎の艶書を出して渡し、

「覺悟があるといふた故、つい封を切つて見た、疑はれては辛い、

そなたに渡して置く」

清十郎は裏表だけ見て懐中へ捻ぢ込み、

「これから以後二人は何うなるのでせう」

云つて長い太息を吐いた。恁那場合には女の方が男より度胸の据るものである。

「何うは、夫婦になるか、なれずに死ぬかまでのことやないか」

「寧ろ死んだ方が増かも知れません」

死ぬことで思ひ出して。

「さうだ、裏で種さんが待つてゐる」

「清十郎」

お夏が呼びかけた。

「妾かて遣りとむないけれど、外ならぬ親の大病、水間へ行くのが道であらう、其代り成るだけ早う戻つてたもらぬと、妾は」

俯向いて、
「焦れ死か、怨み死か、何方かで死んで了ふ」
袂を顔に當て、

「それを忘れぬやうにして、父さんの死水だけとつて来や」
死水と聞いて清十郎は胸をわく／＼させて居た。と、お夏は何と思つたか、突と立つて納戸の方へ走り込んだが、間もなく袂に何やら忍ばせて出て来た。

四邊へ目を配りながら、

「これは誰も知らぬ亡母さんの形見、水間へ行く路銀にしてたも重みのある服紗包を清十郎の手に握らせ、

「小判で七十兩あるゆえ、何彼の役に立たう、誰にも云はぬやうに好いかえ」

清十郎は躊躇した。

「こんな大金を」

「私のお金は使えぬとでも云やるのか」

「そ、そ、ういふ譯では」

「なければ納めて置いてたも、水間の父さんに萬一のことでもあれば、何彼と費用がか、らうほどに」

清十郎は芳志を嬉しく思つた。

「それではお預りいたして置きます」

包を懐中して庭に立ちは立つたものゝ、さて何うして可いか思案が決らなかつた。

其處へ使者の種吉が入つて來た。

「清さん、地體まあ何時まで待たす意ぢや」

其聲にお夏は怦然として、逃げるやうに納戸の方へ入つた。種吉

は其後姿と清十郎を七三に見分けて、迂散さうに怪しく笑つた。

「エへへへへ」

種吉に不意を喰はされて清十郎も怦然とした。

「おう種さん、待たせて済みません」

「済むも済まんもお前」

種吉は草鞋穿きで飛石を渡つて、振擧げのまゝ、椽端へ腰を据えた

糞入を弄りながら、

「あれから何刻待たせると思ふのぢや、今日明日の知れぬ大病人を

控えて、氣の永いにも程度があらう」

「氣にはかゝつて居ても、旦那さまの方に御都合があつて」

「お前の旦那さんは、えらい若い綺麗なお方ぢやな」

云つて種吉は揶揄ふやうに笑つた。清十郎は顔を赤らめて俯向いて居た。

「それはまあ冗談として」

種吉は火を点けるでもなく煙管を弄つて、

『お家に何ういふ御都合があらうと、外ならぬ親の大病、邪が非でも、水間へ戻つて貰はんことには、私が往んで村の衆へも顔が合せん、氣の弱いお前では埒は開くまい、私から旦那さまへお願ひして見る』

種吉は貰入を腰に挿して椽臺から座敷の中を覗いた、其處に九左衛門の居やう筈はなかつた。

『清さん、旦那は何處にござるのぢや』

『此處に居る』

云つて九左衛門が店の方から戻つて來た。

『おう、これは旦那さん』

種吉は振箒を下すやら、頸から手拭を脱るやらして、椽臺に兩

手を支いた。

『私は泉州水間の百姓、種吉と申しまするもので』

『清十郎の親里から使者に來たといふのはあんたか』

『へい、左様でございます、清十の父親が大病に罹りまして、迎も

助からんといふお醫者の診断でございますので』

『その事は清十郎から聞いた、見られる通りの有様で、實際私の方

でも辛いと思ひなさい』

『御尤さまで』

『これが外の手代でもあれば、また代りの算段も付くといふものぢやが、貰ひ込みの方は此清十郎に任せてあるので、私の方ではえらい手ちがひぢや』

『御尤もさまで』

『と云ふて私の方都合ばかりも云ふて居れまい、それでは憊ういふことにしては何うぢや』

『へえ』

『今から立てば明日の晩には水間へ着かう、其晩充分親子の名残を惜んで、明後日は極朝に水間を立つやうにな、さすれば明々後日は内へ戻れる、氣忙しうても今の場合ぢや、清十郎爾いふことにして呉れ』

清十郎は黙つて頭を下げた、種吉も本人さへ連れて歸れば役目は立つのであつた。

『では爾いふことにお願ひいたします』

『咄が決れば清十郎、直ぐに立つたが好からう』
忙き立てる側から、

『父さん、路銀は』

それはお夏であつた、何時の間にか座敷の障子の蔭に立つて居た。九左衛門は澁々ながら若干かを包んで清十郎に渡し、

『懇々も云ふて置く、一刻も早う戻つて呉れんとならんぞ』

それから間もなく清十郎は身仕度をして出て來た。

『それでは旦那さま、行つて參じます』

『おう、成るだけ早う戻つてな』

障子の蔭からお夏が、成るだけ早く戻つて欲しさうな目許をして、名残惜しく見送つて居た。

清十郎も直ぐに戻る意で、お夏の方へ眼をちらちらさせた。



清十郎が郷里へ行つてからも、五日経つた。三日目の晩か、遅くも四日目の朝には戻つて来る約束であつたので、今日こそはとお夏は、朝からお湯を使つたり、鏡臺に向いて髪を梳き付けたりして待つて居た。一日顔を見ないで居ても、十日も二十日も逢はないやうに思える戀仲である、お夏は一年も二年も逢はないやうな心持がして、清十郎が戀しくてならなかつた。

「お玉、清十郎はまだかえ？」
 滅多に出て来たことのない勝手元へ出て来て、お夏は二度も三度

も下女のお玉に訊いて見た。お玉も、清十郎には待ち焦れて居るのであつた。

「まだつせ、何ないしやはりましたのやろ」

お玉も心配の小首を傾げながら云つた。父親の佐治右衛門が息を引き取つたので、序に葬ひを済して来るので、それで遅くなるのだらうの、父親が死ねば後には妹のお俊より居ない筈である、其妹の始末や家の取片附で豫想外に手暇取るのだらうの、そんなことを云ひ合つては互に氣を紛らせて居たが、時にはお玉が恁那ことも云つた。

「男氣のない家だすやろ、親類縁者が相談して、もう清さんは奉公に出さん意だすやろ」
 だの、

「途中で船が難船して、人の居ん島へ流されたか、それとも船が
轉覆つて、死んで了ふたのかも分りまへん」
だの、延喜でもない想像を事實かなどのやうに喋り立て、お玉
も青い太息を吐いて居た。

「延喜でもないこと云ふてたもるな」

其の都度、お夏は叱るやうに云つて、とつとと座敷へ逃げ戻つた
が、少時するとまたお玉の側へ寄つて、

「お玉、まだかえ？」と訊くのであつた。

四ツから九ツ、八ツ半から七ツになつても、清十郎の戻つて来た
様子はなかつた、店へも五六度出て見た。

店へ出ると云つても、戦場のやうな雑沓の中へ出るのではなかつ
た、中の間と店の間の暖簾の蔭から、袂と裾とだけ見せて、布の切

目へ片目を當て、様子だけ密と覗くのであつた。

何時も源十郎の座つて居る帳場には、人手が足りないので父親の
九左衛門が座つて居た、鼈甲縁の老眼鏡をかけて算盤珠をぱち
させながら、附木に書き留めた柀目の高を土臺に、それを金目に直
しては次から次へと通貨を渡して居た。

一石六斗三升、何の某、四斗二合八勺、水上村作右衛門……一々
帳面に附けては、藩札、朱銀、波錢と金高に應じて取揃えて渡すの
で帳場も却々多忙かつた。

店前の買ひ込みの方はそれより一層こみいつて居た。

清十郎が居いので、源十郎が勘十郎の手助けをして居る、裾褰げ
に草鞋穿きの赭黒い素足の隙から、瑪瑙色をした玄米の山が見えて
柀と斗搔が面白いほど動いて居る、右するもの、左するもの、人垣

を作つて居るもの、飼馬に秣草を喰つてゐるもの、庭藏へ俵を擔ぎ込むもの、吠を俵に詰め替えるもの、眼の眩むほど多忙かつたが、何處を見ても清十郎らしいものは見えなかつた。

四日前までは清十郎は入口から少し右手へふれた處に陣構えをして、人垣に圍まれながら懸命に柵を使つて居た、お夏は一日に三度も四度も暖簾の蔭まで出て来て、往來を眺める振をしては清十郎の色白な顔に恍惚れるのが例であつた、其清十郎の陣構えの場處には似ても似付かぬ勘十郎が人垣に圍まれて柵目のことで口きたなく罵り合つて居た。

『暗嘩だ』

お夏は唯爾思つただけで二階へ駈け上つた。勘十郎の口論は毎度のことなので、お夏には少しも珍らしくなかつた。



二階は雨戸が締つて居るので、何の部屋も此の部屋も眞暗であつた。

つい一二ヶ月前の秋祭に、三四人がかりで雨戸といふ雨戸を悉然開け放して、天井を掃ふやら畳を拭くやら、大騒ぎをして取片付けた限拭掃除は一度もしてなかつた、表替えをしてまだ間のない畳が氣の所爲か埃でざら／＼するやうにも思えた。

お夏は抜き足で明窓の側へ寄つて、内から重い戸を外へ押し開けた、四邊が仄明くなると鼠の糞が見えた。鼠は此家に何百匹居るか

し
知れなかつた。

階梯はしごに近い一ト間の襖ふすまを開けると、窓まどの明あかりで内の様子やうすが仄ほかながらにも見透みすかされた、此間ここにも鼠ねずみの糞ふんがあつたがお夏なつには嬉うれしい思おもひ出での場ばしよ處ちよであつた。

清十郎せいじうらうと三度目さんだめに密會みつわいしたのが此間ここである、四度目よくだめにも此間ここ、五度目ごだめにも此間ここ、それから何度なんども此間ここで合あつた。その時ときのことを思おもふと、お夏なつは譯わけもなく顔かほが火照ほてつた。

他家よそでは何なんといふか知れなかつたが、但馬屋たじまやでは此間ここのことを簞たん笥すの間まと呼よんで居ゐた。八疊やぶの間まの二方はうに簞笥たんすが七八ななつも列ならんで居ゐて鏡臺けうだいも二三臺隅だいすみに積つみ重ねてあつた、お夏なつが生うれぬ前まへに亡なくなつた祖母おばあさんの簞笥たんすもあれば、死しんだ母親ははの以前いぜんの母はは、九左衛門くざゑもんには先せん妻さいに當あたる人ひとの簞笥たんすもあつた。

『これが祖母おばあさんので、これが前まへの阿母おかあさんのであらう』

お夏なつは勝手かたてにそれと決きめて好よく匣出ひきだしを開ひらいて見みた、匣出ひきだしは大低空たいていからであつたが、それでも偶たまにはどつしりと重おもいのに出會でくわすことがあつた。笄こうがひの折ひれたのや、簪かんざしの珠たまだけのや、櫛くしや鏡かみの入はいつた匣出ひきだしもあつた。

『お夏なつ、何なにをして居をるのぢや』

何彼なにがの用事ようじで上あつて來きた父親ていおやに見咎みとがめられて、お夏なつは顔かほを火ひのやうに赤あからめたことがあつた。清十郎せいじうらうを待まちち合あはず間の氣紛きまれに、音おとのせぬやうに匣出ひきだしを開あけたり閉しめたりして居ゐた時ときであつた。

それから此間ここが怖こわくなつて、四度よくだめに一度いちどか、五度ごくだめに一度いちどの割わりでなければ滅多めつたに此間ここでは逢あはなかつた。

甘あまい戀こひの思おもひ出でに耽ふけりながら、お夏なつは薄暗うすぐらい簞笥たんすの前まへに立たつて居ゐ

だが、雨戸をも開ける気にはなれなかつた。

『こうして居る間に、戻つて居るかも知れぬ』

爾思ふと一刻も沈として居れなかつた、明窓の戸も匆々に締め込

んで、階梯を迂るやうに駆け降りた。

店を覗いても清十郎は見えない、お玉に聞いてもまだであるとい

ふ。その間に日は暮れて、六ツの鐘が哀しく鳴り渡つた。

『今日も戻つて来ぬ』

お夏は座敷の椽に立つて、何時までも暮れ行く空を眺めて居た。

灯が點る、店の大戸が締る、帳合が初まる、……もう全然夜の気分

であつた。

清十郎は遂に戻つて来なかつた。

帳合が濟んで、風呂へ入つて、家内の者が爽快した気分になつて
夕餉の膳を圍んだのはもう大分遅かつた。此頃の例として番頭手代
のお膳の上には、白鳥が一本宛載せられて居た。

『皆、草臥れたらう、私に構はず飲つて呉れ』

板間に薄縁を敷いた駄々廣い臺所の正面から、下り向になつて晩
酌を初める九左衛門は判で捺したやうに恚う云つて劬るのが例であ
つた。昨夜も、一昨日の晩もさうであつたが、此日に限つて熟んだ
ものが潰えたとも云はなかつた。

九左衛門の隣にはお夏が居た、お夏は毎晩父親のお酌をするのが唯一つの役目であつた。それから少し離れて番頭の源十郎、勘十郎清十郎が居れば清十郎と順に兩側に居流れて、主従が同時に箸を把るのである。丁稚の長松のお膳にも、別に煮肴が一皿附いて居た。手傳人は一刻前に箸を擱いて皆我家へ引き取つて居た。

「父さん、皆待つて居ります」

お夏は見兼ねて父親に注意した、例日のお聲が、りがないので、皆遠慮して控えて居たからであつた。

「お夏、注げ」

九左衛門は頗で白鳥を指して云つた、お夏は店の者に氣を兼ねながら注いだ。注ぐ端から猪古が干されて、四つも五つも數が累なつた、何うせ雷神が落ちることは皆腹の中で覺悟して居た。

けれど其れは誰かの失錯ではなかつた、年の所爲で眼が薄いのと後から後から追ひ立てられる多忙さにツイ逆上せて了つて、九左衛門が一兩二分ばかり通貨を渡し過ごして居るのであつた。

帳台の隙取つたのも、夜食の遅くなつたのも皆其れが原因して居た。

だから誰も自分へ雷が落ちて來やうとは思つて居ない、旦那の無遮苦遮腹を他人の落度で癒さうといふのであれば、それは清十郎の戻りの遅いことに托つけるであらうと思つて居た。

お夏もそれは覺悟しなければならなかつた。

と、案外、九左衛門は勘十郎を呼びかけた。

「勘十」

勘十郎は意外の眼を向けた。

『お前は柵目を胡麻化すさうな、何でさういふことをするのぢや』

『旦那さん、誰も柵目なぞ』

『いんや云ふな、三四日帳場へ据つたお蔭で、店のことは何も彼も知れた、源十に手助けをさせなんだら、在所者は皆他店へ行く、近懲するにも程度があらう』

勘十郎は俯向いて黙つて居る。

『柵の使ひ方を知らぬといふなら兎も角、賣る時は四斗俵を四斗九合まで出すお前ぢや、買ふ時に限つて四斗俵を切り込ますといふ法はない』

『それでは旦那さん』

勘十郎は向き直つて、

『お家へ忠義はしてはならんと被仰るのでございますか』

『誰が忠義をするなといふた』

『でも私には爾聞えます、清さんのやうにお家のことは何うでもいい、在所者の人氣さへ取つたら好いのや、といふ腰であれば、何ほでも柵目を出せませうが私はさういふ氣には何うあつても成れません』

勘十郎は顔を眞赤くして云つた、行く／＼はお夏を掌の中に入れて、但馬屋の養子に成り上らうと計劃んでゐる勘十郎は、一合でも主人に得を取らせて、九左衛門から見込を付けられるやうにと淺墓な考えからこれまで柵目を盗んで來たのであつた、それを場所もあらうにお夏の前で叱言を云はれては、勘十郎は實際立つ瀬がなかつた。

『恚うして御厄介になつて居るからには、清さんのやうに主人に損

をかけても空人氣が取りたいとは夢にも思ひません』
云つて沈着のない眼をぎろくさせて居た。
お夏は心底勘十郎が憎らしかつた。

二三

「加之に清さんは」

勘十郎は方角ちがひの清十郎を貶しにかゝつた。

「在所の百姓と結托して、柵目を出してやつただけ歩を貰ふて居ると聞きました、私には爾いふ藝は仕たうても出来ません』
「清十郎が歩を取つて居るッ」

「へい、そのことは五六人から聞いて居ります、旦那さん、そればかりではございません』

勘十郎は清十郎の不在を好い機に、但馬屋を失錯らせやうとも思つて居た、戀敵とは二三年前から狙んで居るのであつた。

「清さんは嬢さんに戀をしかけて、一生の瑕物にした上でお家の身代まで』

流石に後は口を噤んだ、源十郎が袖を引張つたからであつた。

「清十郎がお夏に戀をしかけたツ?」

九左衛門は、もう血眼になつて居た、平日より少し酒の過ぎた所爲でもあつたが、素面の時からの胸の鬱勃が一時に發して、清十郎の戻りの遅いことが堪らなく癢に障つた。

「諾、勘十好う云ふた、地體清十郎は私を馬鹿にして居る、十一の

歳から吾子同然に眼をかけてやつた恩義も忘れて、親の大病とは云へ此多忙い時を見込んで水間へ行く、それも三四日は私も承知した、今日は何日目ぢや、五日目になつてもまだ戻るまい、一兩二分損したのも彼奴のお蔭ぢや、その上在所者から歩を取るの、身代に目をかけてお夏に戀をしかけるの……何うしてやるか今に見て居れ」

顔に蚯蚓のやうな痲筋を立て、九左衛門は首を振りく御託を列べた。

『勘十郎』

お夏は泳え兼ねて勘十郎を呼びかけた、戻りの遅いは清十郎が悪いにしても、在所者から歩を取るの、身代に眼をかけて妾に戀をしかけるの……戀は妾からしかけたのである、身代に眼をかけるの、

歩を取るのと氣もないことを告口して父さんを立腹させる、清十郎がその様な男に見えるか、お前の仕草は何うや……。

父や大衆の前で附文のことを云つて、顔向のならぬほど耻を搔かせてやりたいと腹の中が煮え狂つて居た。

『好うそのやうなこと云やるの、お前は私に……』

後は流石に云へなかつた、清十郎とが構曳をした現場を見て居たといふ長松も居り。耻しめてやつては後の祟も怖かつた、云ひたい心と、云ふなと押へる意と、小さい胸に纏れ合つて口も思ふやうには利けなかつたのである。

『よく、覺えて居や』

唯それだけ云つてお夏は袂を顔に當てた。

勘十郎は淋しい笑を漂えてお膳の上の肴を睨んで居た。

『勘十が悪いのではない、清十郎が悪いのぢや』
九左衛門はまた叱言を初めた、諄いほど列べる文句を煎じ詰める
と、眼をかけて居る清十郎が五日経つても戻つて来ぬ腹立しさの愚
痴であつた。

『もう宜しうございます、明日は是が非でも戻つて参りませう』
源十郎が見兼ねて賺すやうに宥めた、それで何うなり彼うなり其
場は濟んだが、それにしても清十郎の戻りの遅いのが、お夏には齒
痒いやうであつた。

翌日も九左衛門は帳場に座つたが、昨夜のことは忘れたやうに清
十郎のことを氣にかけて居た。

廁へ通ふ度にお夏を呼んで清十郎はまだかと訊いた。お夏は俯向
いた限返事もしなかつた。

六日目が暮れて七日目が来た、それでも清十郎は戻つて来なかつ
た。

延喜でもないと氣にも止めて居なかつた難船のこと、奉公を止め
にすること……そんなことがお夏には氣になり出した、併しそれな
らそれで何とか便でも寄越しさうなものだと思つた。その便さへな
かつた。

酒の上だと思つて居た九左衛門の立腹が、日数が延びるにつれて
本氣になり出した。

空

「恩知らずめ、義理知らず奴」

清十郎の咄が出る度に九左衛門は恚う云つて眼の色まで變えた。

お夏はこれが一層辛かつた。

「水間へ遣るではなかつた」

さう思つて彼の時止めなかつたことが取りかへしの付かぬほど残念にも思えた。

其間に買ひ込みの時期が済んで賣の時期が来た、庭藏から裏藏へギツシリ詰まつて居る米俵を、飾磨へ運び出して飾磨から船に載せて京、大阪、堺方面へ賣に出すのであつた、二三年前までは番頭の源十郎が行つたが、一昨年からは清十郎が商ひに出て行つて、今年も無論清十郎が行く筈であつた、その清十郎は賣の時期が来ても影も形も見せない。

「心變りをしたのではあるまいか」

變り易い空模様を眺めては、お夏は爾も思つた、もう店がゆつくりして居るので、唯さへ静な離座敷は淋しいほど閑寂して居た、物思ひには相應しい部屋である。

障子を開けて空を見ると、灰色の雲が幾層にも重なつて晴れやかな蒼空は何處にも見えない、秋ももう暮れて、冷たく吹き込む風は冬の先布令であつた。

「清十郎は何うして居るのであらう」

袖と袖を胸の上に重ねて、お夏は柱に凭れながら物案じに耽つて居た。死遅れた虫が土藏の礎の下で斷末魔のやうに鳴いて居る。

土藏！、土藏！、

大切な物ばかり納つてある内庭の土藏は、お夏には忘れられぬ嬉

空

しい思出の記念であつた。

それは今年の夏のこと。

庭の松の木に油蟬がとまつて、油の煮立つやうな鳴方をして居た。浴衣に腰紐一つ結んだお夏も、五體を煮られるやうに暑苦しくて身の置き場もないほどに思えた。開け放した障子の外は焼け付くやうに日が射して、葉といふ葉、木といふ木が身揺ぎもしなかつた。

「あア暑い」

離座敷から枕と團扇だけ持つて母屋の座敷の中央へ寝轉んで見たが、此處も同じく風がなかつた、軒に吊した走馬燈が團扇で螢を追ふて居る女の影繪を此方へ向けたまゝ、何時まで経つても動かうにしなかつた。油蟬が二匹になつて鳴いて居た。

お夏は椽先まで出て来て團扇で追ひ立て、見たが、蟬は素知らぬ

顔で前より一層喧ましく鳴き立てた。

「厭らしい蟬」

呆れて見て居たがお夏の方が魂負けをして、團扇を持つたまゝ、耳を塞いで土藏の中へ駆け込んだ。

壁が厚いだけに藏の中は冷りとして居た。

沙漠の旅行者がオーシスでも見付けたやうに、お夏は悦んで土藏の中へ枕や花莫塵を運び込んだ。

階下には諸道具が詰つて居たが、二階は迦藍として二三十人は平

氣で寝轉べるだけの場處が空いで居た。兩側の武者窓を明けると、桐の青葉が透き通るやうに明るく見えて、涼しい風が何處からともなく吹き込んだ。

お夏は床板に塵を敷いて、膝を掻き合せながら寝轉んで居た、鏡のやうな蒼空に眞白な雲が浮いて、それが色々な形に姿を變えた。小島のやうになつたり、天狗の面のやうに見えたり、かと思ふと犬や馬のやうな形にもなつて見えた。

夏祭の衣物のことから、帯の柄のことまで考えて居る間に、何時の間にかうとくと眠氣さして來て其ま、前後も知らず眠つて了つた。

それからお夏は恁んな夢を見た、枕許に死んだ母親が座つて居る阿母さんは死んだ筈であると思ひながら、黙つて見て居ると母親は

晴やかな笑顔をして、添寢でもするやうに横になつて、右手で抱え寄せて片頬へ口を當てた、口は利かぬが慥かに母親である、まあ、私の阿母さんは生きて居た、哀しい葬ひをしたのは夢であつたのかそれにしては今まで何處に居たのであらう。

『阿母さん、阿母さん』

聲を出して呼んだと思ふと眼が覺めた、額から脊中へ汗を一杯かいて居た、胸も足も羞かしいほどはだけて居た。

弗と、氣付くと床板がミシ／＼鳴つて、誰やら階段の方へ行くらしかつた。お夏ははッとして起き直つて、襟や膝を掻き合せながら見向いて見ると、それは子供の時から仲好しの清十郎であつた。

『清十郎』

思はず呼びかけてお夏は火のやうに顔を赤らめた。清十郎もはつ

として階段口から此方を振り回つた、白い顔を櫻花色に染めてゐた

二人はそれ限口を利かなかつた。

清十郎が階下へ降りて行つてからも、お夏は膝を見詰めたまゝ、永いこと身動きもせず居た、日暮に間もないと見えて吹き込む風も冷たかつた、車井戸の音がせわしく響く。

其日からお夏は清十郎のことばかり思ふやうになつた。

翌日も土藏の二階で寝轉んだ、眼を瞑つても寝入るのではなかつた、今来るか、もう来るかと清十郎の足音を待ち焦れた、けれど其日は遂に影も見せなかつた。

其翌日も土藏の二階で寝轉んで居た、待つても待つても清十郎は來なかつた、齒痒くも腹立たしくも思へた。

其晩、父親の次に風呂へ入つて、糟袋で襟の邊を古擦つて居ると

湯殿の外で清十郎とお玉の聲がした、お夏は眩暈がしさうに思へた。

「お玉、お玉」

夢中で呼び立て、戸の外から顔を出したお玉を、お夏は横目で

二度ばかり睨め付けた。

「今のは誰や？」

お夏は叱るやうに聞いた。

「今のは……」

お玉が答え澁ると、お夏の胸は嫉妬に燃えた。

お玉も清十郎には気があつた、湯殿の外の立咄は何でもないことではあつたが、氣のあるお玉には腹の底を見透かされたやうに思えて、お夏への返事が妙に澁つたのであつた。

けれどお夏には必然怪しいことのやうに思えた。

「お玉、父さんに告げるが好いかえ」

「旦那さんに云はれたかて」

悪いことはして居ないとは思つたが、仍且氣は咎めた。

「大事ないかえ」

お夏は腹の底を探るやうに念を押して見た、お玉は口の内であつた云ふだけで思ひ切つて構ひませんとは云はなかつた。

「屹度告げる、覺えて居や」

其時は屹度告げる意であつたが、お湯から出て浴裕に着替えて、團扇を提げて表の床几へ涼みに出た頃にはもう其事は忘れて居た。

夕餉を濟めた店の者が三人も四人も涼みに出て来て、お夏の氣を迎えるやうなことを云つたり仕たりして皆を笑はせたが、清十郎はお夏の眼から避けるやうに避けるやうにして居た。それがお夏を一層焦れ氣味にさせた。

何時讀んだのか勘十郎は黄表紙の梗概を巧妙な手振までして語り出した、咄上手なのでお夏もツイ釣り込まれて居たが、勘十郎に秋波を使はれるのが厭さと、清十郎の舉動の物足りなさに永くは涼ん

で居なかつた。

『清十郎はお玉と怪しいのであらうか』

爾思ふと堪らなく胸が焦々した、命にも換え難い大切な寶物を、盗人に奪られて行くのを手出しもならずに見てゐるやうな心持である。

『あれ、それを』

と、後から叫びたい、盗人を捕つて押へて、其手から寶物を奪ひ回したい……そんな氣が胸一杯になつて、其夜一ト晩寢がへりばかり打つて居た。

翌日の八ツ時にも、お夏は土藏の二階で心待ちに待つて居た。迎も來さうな氣勢はなかつた。

『嗟吁……』

莫塵の上に膝を崩して座つて獨で歎息して居たが、昨夕勘十郎から聞いた黄表紙のことを思ひ出して、氣紛れに繪でも見やうと思つた、二階から下りて土藏の入口まで來ると、其處へ清十郎が通りかゝつた。

お夏ははつと思つて、胸を躍らせた。

『清十郎』

清十郎は突と立止つて此方へ向き直つた。

『お呼びになりましたか』

『お前御苦勞やけど、離座敷へ行つて黄表紙を持つて來てたもらぬか』

『何といふ藝題の黄表紙でございます』

『何といふのでも大事ない』

お夏は顔を赤らめながら云つて、逃げるやうに二階へ駆け上つた
清十郎が黄表紙を持つて土藏の階段を昇りかけた頃には、お夏は
雨の袂で顔を隠して莫塵の上に慄えながら俯向いて居た。

.....
.....
.....
お夏と清十郎と好い仲になつたのは其日からであつた。

其頃から龍野の縁談が持ちかけられて居た。

「誰が養子なぞ娶ふものか」
お夏は何時も爾思つて、身も心も清十郎に打ち込んで居るのであ
る、假し此世で清十郎と夫婦になれなくとも、死んで未來で夫婦に
なる意で居た、死んで了へば父親もなく、但馬屋もなく、主人の娘
と奉公人の隔てもない、龍野なぞ最初から數に入れて居ないのであ
つた。
罷りちがえば戀の自由の叶ふ未來へ走らう、慾には此世でも添ひ
遂げて未來でも添ひたい、清十郎と二人居るのでさへあれば、お夏
は何那憂い目でも見る意で居た、火の中でも、水の中へでも、清十
郎と二人でさへあれば聊かも辭せんと覺悟して居た。
其肝腎の清十郎が、死んだとも生きて居るとも便かないのである
お夏は死ぬにも死ねなかつた。

「お嬢さん、これを」

お玉が何やら袂へ入れて逃げるやうに走つて行つた、お夏は唐突を喰つて呼び止めることも忘れて居た。

「何であらう」

思つて袂へ手を入れて見ると手紙らしかつた、若しや清十郎からの便では、と思つて出して見ると「お夏さま、御存じより」としてある、筆蹟で勘十郎であることは直ぐに知れた。

「厭らし」

疊へ叩き付けて足で踏み付けた、五日目の夜、清十郎の有ることないこと父親へ告げ口したことを思ひ出すと、踏み付けた位では腹に癒えなかつた。

「寧ろ、父さんに見せて上げやうか」

拾ひ上げて爾も思つたが、清十郎との秘密を知られて居るので滅多なことは出来なかつた、それも清十郎が戻つて来ぬと極れば何那にも詮方はあつたが、遅かれ早かれ清十郎が戻つて来るとすると、勘十郎を怒らせるのは二人の自滅を迅めると同一である。

「最少し辛抱して見やう」

封のまゝ、附文を寸断々々に裂いて、小さく丸めて、廁へ捨て、それで漸と胸を擦つた。

其日も遂に清十郎は戻つて来なかつた、戻つて来る来ぬの問題は通り越して、せめて便だけでもと其れを待ち焦れて居るのであつたが、其便さへ何時のことやら……。

便に家出せよとあればお夏は其場からでも家出する意で居た、何日の何時に死ぬとあれば、それをも厭はぬと覺悟を決めて居るので

あつた。

其便さへなかつた。

死んだやうな目が二日續いた。一二度見たことのある中老のお客が、此頃になつて繁々足を運び出した、龍野からの媒介役であることは薄々感付いて居た。

「誰が、誰が、養子なぞ……」

眼に一杯涙含んで、襦袢の袖をペリ／＼引き裂くことさへ間々あるやうになつた。お夏には見ることに聞くことが皆癢に障つた。

或日の朝であつた、廊椽を渡る足音が聞えて、誰やら離座敷の襖を開けた。父親にしては遠慮勝ちな歩音だと思つて、何の氣なしに振り返ると手代の勘十郎であつた。さもなくてさへ焦躁した氣分に囚はれたお夏である、心持ち座を退つて睨め付けるやうに勘十郎を見詰めた。「何で來やつた、用があるなら父さんの前で聞く、彼方へ行つても」事によれば聲も立てまじい氣勢であつた。「旦那さんのお許可があつて参りました、用が濟めば被仰るまでもなく彼方へ参ります」勘十郎もむツとして云つた、鬨際に支いた手を膝頭に支き直して怨しさうにお夏を見返した。

「では用を聞く」

「用は、これから大阪へ上ります、欲しいものもあらうからお夏に聞くと旦那さんが被仰いました」

「大阪へ」

それは賣方にであらうとお夏は直ぐに察した、それに付けても清十郎が思ひ出せる。欲しい物は幾何もあつた、けれど勘十郎には頼みたくなかつた。

「欲しい物は何にもない」

お夏は顔を反向け云つた。

「ございませんか」

「ない」

勘十郎は腹の中で、唯一つございませう、それは清十郎といふ戀

しい物が……と咽喉まで出かけたが口へは出して云はなかつた、妬けたやうな、嘲けるやうな、何とも云ひやうのない笑ひ方で胡麻化して。

「それでは行つて参ります」

片手を鬨に支いたが、お夏は横を向いて居た。

「お夏さん」

勘十郎は糞度胸を決めて呼びかけた。

「此間の手紙の返事を下さいませんか」

流石に聲は低かつた。

「勘十郎、好く云やるの」

お夏の眼は涙含んで居た。

人が黙つて居れば好いことにして、返事を呉れとは好う云へた、

日外の晩、父さんに何と云やつた、お家の身代に眼をかけて清十郎が妾に戀をしかけたと、忠義さうに告げ口したことを忘れては居やるまい』

口惜しさうに眼を押へて、

『それは誰のことを云やつた、吾身のことではないか、一度も二度も厭らしい、胸を擦つて泳えて居れば好いことにして、返事を呉れとは好う云へた、誰が、誰が……』

『それでは手紙を返して貰ひます』

『手紙なぞ何時まで置くものか、引き裂いて湯殿へ捨てた、欲しいなら覗いて見や、まだあらう』

これには勘十郎もむかついた、下唇を噛んで黙つてお夏の横顔を睨めたが、何と思つたか領いて物も云はず立ち上つた、襖を邪慳に

締め切つて廊椽を母屋の方へ消えると、お夏は肩で吻と太息した。もう大分捨て鉢になつた身は、勘十郎の祟位に恐怖では居れなかつた。

焦烈度い日が一日、一日と過ぎた。

龍野との縁談は着々歩を進めて、お夏の仕度さへ出来たら何時でも祝言の杯を擧げられる處まで運んで居た。

清十郎は何うして居るのであらう。

清十郎もお夏と同じやうな、寧ろヨリ以上に焦躁した日を送つて

居た。

三日か、四日といふ約束では迎も途中で閑取りは出来なかつた、海が穏かで、船が豫定通りに大阪へ着いても四日といふ日数は水間への往復に充分ではなかつた。便船にでも遅れたら、それをこ一日の豫定は直ぐに狂つた。

「種さん、成るだけ急いで呉れ」

清十郎は姫路の城下を放れると二度も三度も恚う云つた、店のことも、親のことも氣になるからではあつたが、それよりも清十郎は一刻も早く戻つてお夏の顔が見たいからであつた。

飾磨では好い梅鹽に大阪行の便船に間に合つた、加古川丸といふ可也な船で、乗合客も二十人近く居た。船が纜を解く頃から、退屈紛れに種々な咄が口々に持ち出された。清十郎も隣合せに陣取つた

五十五六の商人らしい人と、行く先だの、生國だのを問はれたり答えたりした。京の糸屋で、飾磨へ商の取引に行つた戻りだと云つて居た。

「あんたは何處ぢやな」

「私は泉州の者です」

「泉州といふと堺か」

「在所です」

「飾磨へは仍且商賣にでも」

「いえ、姫路へ行つて居ました」

「城下に親族でも有るのか」

「奉公して居ます」

「何といふ家へ」

清十郎は何家とも名乗らなかつた。

「姫路の城下なら私も二三度行つたことがある、小間物屋か、それとも呉服屋かな」

清十郎は唯笑つて居た。

「そして、これから泉州へ往んなさるのか」

「父が大病なので」

「それは御心配ぢやな」

船が大阪へ着くまでに糸屋は二三度便所へ立つた。

「濟まんが鳥渡頼みますぞ」

云つては手行李を清十郎に預けた、清十郎も其都度快く引き受けた。

川口へ着いてからも糸屋と一緒に船を下りた。清十郎が橋本屋へ

詞をかける間に糸屋は先へずん／＼行つて了つた。

橋本屋は川口の間屋で、但馬屋とは古い交際であつた、秋に買ひ込んだ米は毎年此橋本屋まで持つて来て、此家から大阪の市中へ歩いて貰ふのであつた。去年も一昨年も来て、清十郎は深馴染であつた。

「よう、これはお珍らしい」

主人の吉兵衛は奥から出て来て迎えた。

「今年はいらい早暮だすな、さア、さア何うぞ上つてお呉れやす」

「いえ、今日は商事で来たのではありません、通りかゝりましたから鳥渡御挨拶に」

「それはまあ御丁寧に、そしてこれから何方へ」

「水間から使者が来ましたので」

『何か變つたことでも』
 『いえ、大したことではありません、今年もまた御厄介に出て來ますから、何分よろしく』
 『すると、直きお歸りだすな』
 『明後日までは往ぬつもりです』
 『明後日までに……往なれまつかいな』
 『そのつもりで急いで居りますから』
 『ま、ぶいでも一つ飲んで行つてお呉れやす』
 『さうしては居れません、御免』
 『さうですか、これは何うも態々、何のお構ひもしませんで、清十郎はん、待つてまつせ、是非あんたが來とくれやすや、今年は景氣が好いさかいうんと儲けさせまつさ』

正直者といふので、清十郎は大阪でも評判が好かつた、四日の約束でさへなかつたら、清十郎も半日位邪魔して行きたいのであつたが、此場合一分間も争はなければならなかつた。清十郎が水間へ着いたのは二日目の夜の四ツ半頃であつた、村は死んだやうに静まつて唯の一軒も起きた家はなかつた。道端の水車が鈍い眠つたやうな音を立て、遠くの杜で狐が鳴いた居た。
 川添の往來から右に曲つて、無花果樹の植つた納屋の横手を通ると、駄屋の匂ひが鼻を衝いて牛の鼻息が微に聞えた、納屋に接續い

盗

て藁屋がある、脊戸の柿の木が黒く見えた。

それが清十郎の家であつた。

「種さん、御苦勞でしたな」

「何のお前、こんな時はお互さまぢや」

納戸の前を通つて入口へ近寄ると、雨戸の閉つた椽の下で鶏がク
くと啼いた。時ならぬ時人の足音を聞いたからである。冷たい夜風
が柿の梢を慄はせた。

「お俊さん、お俊さん」

種吉が入口で呼んだ、足音を聞いて迎えに出て居たと見えて、お
俊の聲が直き戸の内側から聞えた。

「種さんか」

「俺ぢや、清さんも戻つて見えた」

戸がたたくと開いてお俊が顔だけ出した。

「お俊」

清十郎は鬨の外から呼んだ。

「兄さん」

お俊は思はず取絶つた。

「父さんに大事はなかつたか」

「大事はないけれど」

お俊はもう片袖を眼に當て、居た。種吉も胸を撫で、
「大事のなかつたのは何よりぢや、佐治右衛門どのも待ちかねてご
ざらう、清さん、一刻も早う顔を見せて進せるが功德ぢや」

清十郎も明日は極朝に立たなければならなかつた。

「さうだ、斯うしちや居れぬ」

盗

土間へ入つて草鞋の紐を解きかける、お俊も襷がけで釜の下を焚き初めた。病間から漏れる行燈の灯影が淡い。

「種さん、直き茶漬をあげます」

洗足湯を沸しながらお俊が氣を兼ねて云つた。種吉は竈の脇で貰を吹かして居た。微聲で、

「お俊さん、お三さんは？」

「病間で父さんの介抱して居てござんす」

「何時もながら感心な」

種吉は掌へ吸殻を羽叩いた。

お三は同水間在の庄兵衛の娘で、清十郎とは七八才の頃から許嫁の仲であつた、清十郎がまだ姫路へ奉公に行かぬまでは、お俊と三人で好く飯事して遊んだものであつた。二つちがひのお三が十九、

それより一つ年下のお俊が十八、清十郎は二十一であつた。

子供の時から清十郎は女のやうな子であつた、山で飛び廻るより内に居て毛毬をついて遊ぶのが好き、田圃へ出て鱒を追ひ廻すより氏神の社で商ひ事して遊ぶのが好きであつた。友達も男より女の方が馬が合つた。

「清さん、お遊び」

誘ひに来る者は女に決つて居た、清十郎が居ないと、「お俊さんお遊び」と云つた、三度に二度まで其聲はお三であつた。

六
姫路へ奉公に出る時、お三とお俊が村端れまで送つて来て呉れたことを清十郎は覚えて居る、お三の父親の庄兵衛から、餞別に二朱銀一枚呉れた、生れてそれほどの大金を持つたことがなかつたので、洞卷に大事に納い込んで、日には何度も衣物の上から押へて見た、それが恰ど三四年の小遣錢の補足になつた。

三年前に戻つた時、お三はもう好い娘になつて居た、結ひ立ての髪に赤い掛物などかけて、赤い顔しながら清十郎の處へ挨拶に出て来た、無論妹のお俊の處へ遊びに来て、偶然清十郎の戻つて居ることを聞いたといふ體に拵えて居た、村の噂で二三日前から知つて居て、心待ちに待ちながら髪など結つたことは清十郎の胸には好く分つて居た。

七日逗留する間にお三の顔を見せない日は一日もなかつた、勿論

お俊の處へ遊びに来るのではあつたが、清十郎には心の底まで洞察して居た。お三の外に娘か五人も六人も押しかけて来た、平日お俊と口も利かない娘まで、お俊さん、お俊さんと云ひ寄つて来た。

「兄さんのお蔭で、五月蠅い、うるさい」

お俊は好くさう云つて笑つた。

それから三年目である、お三が病間に居ると聞いて、清十郎は妙に氣が廻つた。

「お三さんが来て居る？」

誰に訊くともなく聞くと、種吉が怪訝さうな眼許をして、

「清さんはまだ知らずか」

「兄さんは知つてゝはござんすまい」

お俊が口を添えた。

「知らん？、妙ぢやなア」

種吉は呆れて了つたといふ顔をした。

「もう彼れこれ満二年にもならう、その間清さんが知らんとは不思議ぢや」

「少しも知りません」

と清十郎が云つた。

「怪體なこつちやなア」

種吉が煙管を擱いて何か云ひかけると、お俊が云ふ勿と目で止めた。温湯が出来たので兄に洗足をさせた。

「父さんが待ち兼ねてでござんす、早う行つて逢ふて上げて下さなせ」

「私も早う逢ひたい」

清十郎は振袈げを下して納戸……納戸に病人が寝て居た……へ静に入つて行つた。

二二

納戸にはお三が病人の脊中を擦つて居た。戸の外の足音でそれと察して、お俊が走り出た頃から胸が躍つて居た。
「父さん、父さん」
清十郎の聲を聞くと、お三は直ぐに病人の耳元へ口を寄せて呼んだ。

「清さんが戻つて、ござんした」

「清十郎が戻つた？」

佐治右衛門は力ない聲で云つて頭を擡げかけたが、其ま、枕に俯伏せた、起き上らうにも體の自由が利かないからであつた。

清十郎が洗足湯を使つて了ふまでに若干かの時刻が經つた。

「父さん」

清十郎が納戸に入つて、仄暗い行燈の横手から優しい聲をかけた頃には、佐治右衛門は顔を入口の方へ向けて微な鼻を立て、居た。

「父さん、清十郎です」

兩手を枕許に支いて、白い顔を灯影に浮かせて云つたが、仍且佐治右衛門はスー／＼鼻息を立て、居た。

お三が見兼ねて病人の耳元へ口を寄せた。

「父さん、清さんが呼んで居さんす」

清さんといふ聲に病人は細い返事をした、起き直るか、眼を開けるか、何方かであらうと静にして待ち構えて居ると、また微な鼻息が聞え出した。

「あれ、父さん」

お三が呼びかけるを清十郎が制止た。

「覺まさぬが好い、其間に眼も開かう」

「先刻まで待ち焦れて居さんしたに、大方安心して氣疲れが出たのでござんせう」

羞かしさうに俯向きながら云つた。

清十郎はお三を睨と見て、

「お三さん、好う介抱して下さる、仇には思ひません」
「何を云はしやんす」

お三は俯向うつむいたまゝ、面かほを染そめて云いつた、鼻しうぞの介抱かいほうは嫁よめの役やくである
當然あたりまへのことをして居ゐるものを、恩おんに被きるやうな口上こうじやうは水臭みづくさいと思おもつ
た、若もしかすると女房にようぼうにはせぬ氣きかも知れぬ、とも思おもつたりした。

對話たいわは其それ限きりで盡つきて、お三は病人べいじんの脊中せなかつを撫なでるやうに擦さり、

清十郎せいじうらうは腕うでを拱くんで病父べいふの顔かほを見守みまもつた。

病人べいじんの寢姿ねすがたは傷いたましく清十郎せいじうらうの眼めに映うつつた、頬骨ほほほねは立たち、眼めは窪くぼ

んで、月代さかやきも髭ひげも茫々ぼうぼう延のびびて居ゐた、平日ふだん至いたつて健康たうじやうな佐治右衛門さぢゑもんは

生うまれてまだ薬くすり一服いっぷく呑のんだことがないといふのが口癖くちぐせの自慢じまんであつた

全く風邪かぜひ一つ胃いかぬ人ひとであつた、それが變かはり果はてた姿すがたになつて居ゐる

ので、清十郎せいじうらうも『これが父ちちさんか』と思おもふほどであつた。

『此この……様子やうすでは永ながくはあるまい』

思おもふと太息たいいきが自おのづと出でた。お三は清十郎せいじうらうの胸むねの中うちを察さつして、灯影ほかげに

顔かほを反そむけた。

勝手かつてではおおがお茶ちやを沸わかして居ゐた。

佐治右衛門さぢゑもんはもう永ながい煩わづらひであつた、最初さいしよは牛うしに喰くはす秣草まゐさを刈か
りに行いつて、左ひだりの食指ひきさしゆびを二夕ふしゆめ節目ふしめから斬きり落おした、傷いたみはしたが
大たいしたことに思おもはずに、傷口きうぐちへ膏藥こうやくを張はつて濟すまして居ゐた、男氣をきけ
のない家うちだけに牛うしの世話せわから畑はたけの手入ていれまでお俊しゆんに任まかせては置おけな
つた。

二日ふたひ目めから熱ねつがででて、全まる一いつト晚傷ばんきやうの痛いたみで苦くるしんだ、翌あくる日ひか

ら痛みは止つたが熱は相變らず出て居た、それが初夏のことで、起きたり寝たりして居る間に植付の時期が來た、厭でも應でも田へ出なければならなかつた。

植付が濟でから佐治右衛門はどつと病床に就いた、お醫者にも診察て貰ひ、煎藥も貰つて服んだが、何うも捗々しく癒えなかつた、其間に腹へ拳固ほどの塊が出て、それが二六時中苦しめた、蓮池の泥を塗ると癒ると聞いて、お三がお寺に貰ひに行つたのはツイ十日ばかり前のことで、今も其泥を塗つて、塊の溶けるやうにお俊と二人で朝晩祈願をかけて居るのであつた。

その事は途々種吉から清十郎は聞いて居た。

「塊はまだ散りませんか」

少時經つてから清十郎が訊いた。

「少しも」

お三は哀しさうに答えた。

泥を塗るやうになつたのは爲有ことを試みた最後の手段であつた門徒だけに加持祈禱こそせなかつたが、禁厭もして貰つた、灸も點てさせた、塗藥もお醫者から貰つて貼つた、揉み療治もやつて見た何れもこれも無駄であつた、一縷の光明は唯泥である、それさへ利目がありさうにも思えなかつた。

「快うなつて下されば好ござんすが」

お三は指頭で臍を拂ひながら云つた、逆も助からぬことは誰の目にも見えて居た、清十郎へ急使を立てたのも、刻々に死期が近付いたからであつた。

清十郎は黙つて太息して居た。

其處へお俊か顔を見せた。

「兄さん、茶漬を食べて下さんせ、お三さん、私が代る故兄さんの

お給仕を」

無理から立たせてお三の跡へ座つた。お三は忸怩して居たが其れでも思ひ切つて勝手の方へ行つた。きまり悪さと、羞かしさと、そして嬉しさがお三の舉動に明々と見えた。

「さ、兄さん、お茶が沸いて居ります、今の方に食べて来て下さん

せ」

清十郎は黙つて納戸から出て行つた。

勝元手にはお膳拵えが整然と出来て居た。圍爐裡の中の粗朶火が赤く燃えて、自在に吊した茶釜が白い湯氣を吐いて居た、灯の入つた行燈の蔭には、人待ら顔にお膳が据えられてあつた。

「清さん、お先へ」

種吉は先に箸を擱いて、爐縁の席の上に胡座を掻きながら、もう蕘にして居た。

「濟みましたか」

清十郎は氣の抜けた調子で云つて、お膳の前へ座りは座つたが、

さて箸を把る氣もしなかつた。お三は盆を控えてお膳の向ひ側に座つて居た。

『どれ、私は御免蒙らせて貰ふ』

貰入を腰に挿して種吉が立ち上つたのは、清十郎が漸と箸を把つたばかりの頃であつた、疲れも休めたく、眠くもあつたのであるが一つはお三の氣を酌んだからであつた。

『種さん、まア好いではありませんか』

清十郎が愛想をいふと、種吉は對座の二人を見守つて、

『内でも嬢が待つて居やう』

意味ありさうな笑ひ方をして表口から歸つて行つた、家は直き近處にあつた。

『御苦勞さんでござんした、明日改めてお禮に出ます』

お三は入口まで送り出して云つた。それからは清十郎と唯二人限であつた。

お三が此家で住むやうになつたのは、此前清十郎が歸省した三四ヶ月後のことであつた。

『清十郎は男前』といふ評判が立つた、お三は夜の目も合はぬほど心配であつた、村の娘が何人ともなくお俊をだしにして、清十郎へ云ひ寄らうとする様子を見ては立つても座つても居られなかつた。子供の時から自分の亭主と思ひ込んで居るお三は人一倍氣が揉めた。清十郎が姫路へ往つて了つてからも、氣の揉めることばかりお三の耳へ入つた。

『喜作の娘のお杉が、姫路まで慕ふて行つたさうな』
だの、

『庄屋のお娘は風邪ひきではないげな、清十郎を聲にせねば死んで了ふと、親御へ面當の假病ぢやげな』

だの、聞くことが皆清十郎を奪られさうなことばかりであつた。清十郎が庄屋の娘と駈落をした夢を見て、泣いて泣いて母親に揺り起されたこともあつた、大阪へ奉公に出たお杉が、姫路で清十郎と世帯を持つて居ると意地悪な村の若い衆に欺されて、父親の庄兵衛に縋り付いて泣いたこともあつた。二ヶ月三月と経つ間に親の眼にもあまり出して『何うせ夫婦にするものなら』と庄兵衛が粹を利かして、祝言を見越しに佐治右衛門の手へ引取らせたのであつた。それからは『果報者のお三』といふ評判が村から村へ傳はつた外氣の揉めるやうな噂はぶつとりと止んだが、今年の秋へ入つてから但馬屋の娘のお夏のことがちよい〜お三の胸を刺した。お夏の母

親が室の津の遊女であること、歳がお三と同年で姫路でも聞えた別嬪であること、何うやら清十郎と怪しいといふことまでお三の耳に入つて居た。

『お俊さん、何うしやう』

お俊の胸に取縋つて泣いたことも、一度や二度ではなかつた。

お俊は其都度、世間の噂の當てにならぬことを云つて慰めた、お三も爾あるべく祈つて居た、遅くも此正月には清十郎が戻つて来る其れを機會に夫婦の固めを交すことに段取が決つて居たので、病人

を神妙に介抱しながら正月を手繰り寄せ寄せるやうに待ち焦れた矢先へ清十郎が呼び戻されたので、お三には思ひがけない嬉しさであつた病人の重態はお三には戀神さまの粹なお取持であるやうにも思えた

『お三さん、お茶を』

清十郎は何の氣なしに茶碗を出したが、お三には爾那ことが嬉しくて堪らなかつた、もう二人で世帯を持つて、對座で御飯を戴いて居るやうにも思はれた。

『御飯は？』

『腹には欲しいが咽喉を越さぬ』

お三は黙つて茶杓を把つた、茶釜の蓋を取ると、湯氣が濛々と立ち登つて、静な屋の内に茶の沸立つ音が手に取るやうに聞えた。

『兄さん』

それはお俊の聲であつた。

『清十郎』

力ない病人の聲も聞える。清十郎は静に急いで納戸へ入つた。佐治右衛門は病床の上に取り直つて居た。

『父さん』

『清十郎か』

父子は行燈の手前で瞥とだけ顔を見合つた、俯向いた清十郎の眼には、木乃伊のやうな父親の姿が何時までも残つた。

『永い間の煩ひなさうで』

『一年近うお俊やお三の世話になつて居る、お前は無事で結構ぢや喃』

『私は無事に勤めて居ります』

「但馬屋では皆お變りはないか」

「お店の方が段々多忙うなるばかりで、何誰も皆息災で居られます」

「それは結構ぢや」

凭れにした薄團が崩れか、つたので、お俊が密と脊後から直してやつた、丹前も胸から掛け直す。

「清十郎、私は這度は助からん」

「氣の弱いことをお父さん」

口では云ふもの、頭は自と下つた。

「いや〜」と佐治右衛門は頭を掉つて、

「今日か、明日かとお迎えを待つて居る、永うて一日、二日とは持つまい」

お俊は病人の蔭、涕を啜つて居た。勝手の跡始末を付けて、病人の脊中を擦りに來たお三も、障子の外で涙を押へて居た。清十郎の胸も迫つた。

「清十郎、もつと近う寄れ、頼んで置きたいことも、聞いて貰はに

やならんことも色々ある」

お俊を見向き。

「お三さんと呼べ」

お三は障子の蔭から出て來てお俊と列んで座つた。夜はいよく更けた。

「清十郎、お三」

佐治右衛門は二人を呼んだ、お三は嬉しい、哀しい、羞かしい思ひをしながら、呼ばれると直ぐに病人の側へ進み寄つた。清十郎は身動きもしなかつた。

「兄さん、父さんが」

お俊が注意しても清十郎は顔も擡げなかつた。

「清十郎、何うしたものでや」

病人は不審の眉を擡めて、

「梅鹽でも悪いか」

清十郎は思ひ直した體で、一ト膝進み出た。先の知れた病父に心配させるでもあるまいと思つたからで。

「何處も悪いことはありません、鳥渡考えることがあつたので」

「さうか、それで安心した、實はお前に云ふのは今が初めぢやが、此お三を娶ふてからもう足かけ三年になる、お俊といふ娘があるのにまた他家の娘を娶ふたと思ふて呉れるな、お三はお前の女房に娶ふたのぢや」

清十郎は驚かなかつた、大方さうであらうとは察して居た、頼みがあるとはお俊の身の上のこと、聞いて貰ひたいとはお三と祝言せよといふことであらうとも思つて居た。但馬屋のこと、お夏のこと、清十郎は少しも沈着いた氣分になれなかつた。

「氣を落ち付けて聞いて呉れ、改めていふまでもないお三とお前は子供の頃から許嫁で、双方の親々が決めたお前の女房ぢや、まだ早いので、奉公人の身の上ぢやの云ふかも知れんが、私に免じて今夜固めの杯をして呉れ、一日のことが云へん私の壽命ぢや、一刻も肩の重荷が卸したい、足かけでも三年の月日は永い、其間悪い顔一つ見せず、今日まで勤めて呉れたお三は私には勿體ない嫁ぢや、天下晴れて嫁と呼んで死にたい、假令半日でも睦じい二人の様子が見て死にたい、それが先立つた媪さんへの好い土産ぢや清十郎、兎角はあるまい、お俊、土器の用意をして呉れ」
 お俊が勇んで立ちかけると清十郎が慌て、止めた。佐治右衛門は見答め、
 「お俊、何をして居る？」

お俊は兄の横手で立ち止つて居た。

「でも、兄さんが」

「清十郎が何うしたツ」

「兄さんが待てと云はしやんす」

「清十郎、それは何うしたものでぢや」

病人の顔は怪しく曇つた、お三は俯向いて疊の目を撈つて居る。

「これ、清十郎、今いふたことが耳へ入らぬか」

黙つて居る。

「此お三が氣に入らぬか」

黙つてゐる。

「そんなら私を見殺しにする意か」

「と、頓でもない」

「それではなかつたら何で制める、お三と杯が何うして出来ん？」
清十郎は仍且黙つて居る。お三はお夏のことを思ひ出して袖口で
舐を押へた。

「兄さん、それではお三さんが可哀さうな」

お俊も胸を詰らせながら横手に膝を落した。

清十郎は石のやうに堅くなつて居た。

「兄さん、それでは噂のやうに但馬屋のお夏さんと」

お俊が思ひ切つたことをいふと清十郎ははツとして面を擡げた、

お夏との仲がお俊にまで聞えて居やうとは夢にも思つて居なかつた

「お俊、滅多なことを云ふまい」

清十郎は恚う云つて病人の前を胡麻化さうとした。お俊は黙つて
居なかつた。

「いえ、滅多なことではござんせぬ、今も種さんから聞きまし
た、あまり兄さんが遅いゆえお庭門から覗いて見たら、お座敷の
椽端でお夏さんとえらうや、こしい處であつたげな、そのまたお
夏さんの美しいこと」

「これ、お俊」

清十郎は狼狽えて口を塞げるやうにした、病人やお三に氣を兼ね
ながら、

「種さんの意地悪を知らぬでもあるまい、ないことを有るやうに云

ふのが彼の人の口巧者、乗せられたことに気が付かぬか」
『乗せられたのぢやござんせん、正真正味見て来た人の咄ぢやもの
その證據には兄さんの懐中に、お夏さんからの艶書と何やら包ん
だ物が』

清十郎は顔色を變えた、それまで知つて居やうとは意外も意外で
あつた。佐治右衛門は聞く間に痛みが出て、蒲團に凭れたま、呻き
初めた、お三は泣きながら介抱して居た。

清十郎はお俊が怨めしかつた、假し其れが事實にもせよ、兄妹の
交誼として、病父の手前として、此場でつけ／＼云ふべき道ではあ
るまいと思つた、時と處とを考えぬお俊の無分別さを、怨めしいよ
りも情なく思つた。

『不孝者め』

病父の苦惱を見ると知らず識らず恁那口が利けた。お俊はお三へ
の義理もあつた。

『何方が不孝者か、兄さん、胸に手を當て、考えて見やしやんせ、
一人よりない父さんが今日明日も知れぬ間に、御主の娘へ義理
を立て、お三さんと杯の出来ぬは、父さんを見殺しにする意でご
ざんせう、それでも孝行者と云へますかえ』

『杯をせぬとは云はぬ』

『それでは杯をして下さんすか、お夏さんに何れほどの義理がある
か知らぬが、お三さんの義理を忘れては天道さまが許しませぬ、
此二三十日夜晝なしの介抱で、お三さんが帯を解いて寝た日は唯
の一晚もござんせん、一昨夜は私の番で昨夜がお三さん、妾は
昨夜寝たけれどお三さんは徹夜の看病、續いて今夜も寝ずの番、

好うまあ軀の續いたものと村の人まで感心して居ります、それほどに勤めて下さるのも、皆兄さんの父親、お三さんには舅に當る人と思えばこそ出来たこと、それを仇にして杯をせぬなど、云はしやんしたら、それこそ罰が當ります、お三さんの氣になつたらどれほど悲しいことやら……』

お俊は怵え兼ねて泣いた、お三も泣いた居た。

『清十郎』

病人がむつくり起き直つて呼んだ、三人の眼が一齊に病父へ注がれた。

『清十郎、懐中の物が見たい』

病人ながら佐治右衛門は聲の調子まで轉えて云つた、懐中には七十兩の服紗包と勘十郎の艶書が入つて居た。

『見せます』

逆らつては可くないと思つて清十郎は艶書だけ出して渡した。佐治右衛門はお俊に行燈を引き寄せさせて、お三に扶けられながら表書も見ずに燃して了つた。

『まだあらう？』

「ありません」

「なければこれでお夏さんとの縁も切れた、改めてお三さんと杯をして呉れ、私が此世での頼み了ひぢや」

清十郎は黙つて居た、病父へも濟まず、お三へも義理が立たぬと思つたが、お夏との約束を反故にする氣には毛頭なれなかつた。

「これ清十郎、何うしたものでぢや」
返事がない。

「これほど云ふても諾けぬといふのか」

佐治右衛門の聲は荒かつた、身動きもならぬ軀を無理から起して瘦せ細つた右手を拳に固めて振り上げた。「い、犬め、豎め」

「あれ、父さん」

お三が抱えるやうにして止めた。涙を押へながら、

「許して上げて下しやんせ、私は、私は諦めました……私さへ諦めて了へば、清さんも仕合せ、お夏さんも嬉しかる……」

云つて聲を立て、泣いた、お俊も泣くく兄を拜んで居た。

「兄さん、お三さんの心根を、察して、察して上げて……」

「諾、杯をする」

清十郎は判然と云つた、何うせ間もなく出立ねばならぬ身である病父の爲め、義理のため、杯だけ交して其れを機會に立たう、姫路ではお夏が待ちかねて居やうと思つた。

「兄さん、眞實かえ？」

お俊は嬉しさうに念を押した。清十郎が眞實であることを誓ふとお俊はお三の側へ飛んで行つた。

「お三さん、杯をするさうな、嬉しからう、父さんも聞かしやんし

たであらう、兄さんの氣が折れた、此やうな芽出度いことはない
氣の變らぬ間に、喃父さん

『應、お三も悦べ』

『嬉しうござんす』

それから間もなく杯が交された。形式に於ては其場から清十郎は
お三の亭主であつたが、心は遠い姫路の空へ飛んで居た。

お三と清十郎の夫婦杯が、四海波に納まつた頃には、東の天が白
々と白みかけたと見えて、雨戸の隙がもう障子へ仄明く映つて居た

お俊は氣轉を利かせて、納戸の次の間へ床を延べて、枕を二つ列
べてお三と兄を休ませやうとしたが、清十郎は何と云つても聞かな
かつた。

『もう夜が明けた、私は爾しては居れぬ』

云つて立ち上つた、夜の白んだのは清十郎にはもつつけの幸ひであ
つたが、お三には本意なさの極みであつた。

安心した所爲か、佐治右衛門は微な躰を立て、居た、お俊はお三
の心根を察して、無理からでも兄を寝かせやうとした。

『兄さん、父さんは好う眠んで、ござんした、あなたも旅のお疲れ
鳥渡の間でも寝て下さんせ』

『いや、私は爾しては居れぬ』

清十郎は脊戸口から外へ出た、冷たい風が肌に泌みて、畑にはも

う霜が降りて居た。

「でも、朝飯にはまだ間もござんす、お三さんは一昨夜から寝ずの介抱、お茶の沸くまで休んで上げて下さんせ」

「私は今朝の間に立たねばならぬ」

云ひく手拭を提げて小川の方へ行つた。今朝立たねばならぬとは、お俊にも寝耳に水であつた。

「今朝立つとは、兄さん何處へ？」

但馬屋のお店は多忙い絶頂、一刻も猶豫がならぬ」

「では、姫路へ往ぬ氣でござんすかえ」

「約束が四日よりない」

「今日明日の知れぬ父さんを残して」

「息ある間にお目にかゝつたら、もう思ひ残りはない」

「杯したばかりのお三さんを置いて」

「また戻る機會もあらう」

流水で顔を洗つて、手拭で拭いて、東を向いて拍手を打つまでお俊は氣の抜けたやうに其處に立つて居た。

「お俊、手數でも結飯を頼む」

云つて、急ぎ足で脊戸口を入りかけた時、お俊が漸と清十郎に取絶つた。

「兄さん、聞えぬ、聞えぬ」

「放せ、もう日の出に間もない、早う立たぬと便船に遅れやうも知れぬ、一日遅れても旦那様へ申譯がない、放せ」

「放しませぬ、旦那への申譯ではござんすまい、お夏さんへの心中立、よう見え透いて居ります」

一言

「氣もない」

「云はんすな、兄さん」

兄を贖め、

「それで兄さんは顔が立たうが、私がお三さんへ顔向けもありませんぬ強て立ちたいなら私を、私を殺して立つて下さんせ」

「そ、そのやうなことが」

「ならぬことはござんすまい、親の死目を目の前に置いて、お夏さんへ心中立するほどのお前、妹の私を殺すぐらゐ何であらう、さ、殺して、殺して」

「これお後、何をいふ、外聞の悪いこといふて貰ふまい」

「云はいでか、それが厭なら、姫路の方をぶつつりと思ひ切つて、今日から内に居て下さんすか」

「それはならぬ」

「なりますまい、それがお夏さんへ未練のある證據、さ、さ、殺して」

「殺す活すのと、怖ろしいこと云ふて貰ふまい、聞いただけでも身の毛が彌立つ」

「それでは立つのを止めにして下さんすか、妾でさへ往かすとむないに、お三さんの身になつたら、何のやうにもして内に居て欲しからう、兄さん寧ろ商人を止めにして、内で百姓して下さんせぬか」

「無理なことばかり云ふ」

清十郎は姫路の空を眺めて、泣きたいやうな氣持になつて居た。



其間に夜は全く明け放れて、彼方此方で啼き切つて居た鶏の聲ももう稀により聞えなくなつて來た、眞紅に染まつた東の天が段々青白く溶けて行つて、鳥が方々で啼き交した。

『何と云はふと、憊うしては居れぬ』

清十郎はお俊の手を掉り切つて内へ入つた、内にはお三が沈んだ顔で竈の前に立つて居た。

『おう、お三さん』

清十郎はお三に頼むより外はないと思つた。

『手数であらうが結飯を頼む』

お三は黙つて頷いた、涙を拭き、棚の櫃を取り下して居た。

お俊は無理にも清十郎を立たせられなかつた。

『お三さん、心配はござんせん、私の目の黒い間は、兄さんは姫路へは飯しませぬ』

清十郎はもう脚絆を付けて居た。

『でも、あのやうに云はしやんすもの、往にたいのであらう』

お三は泣く泣く結飯を拵えて居た。

『兄さん、お前は』

またしても取継るお俊を、清十郎は思ひ切つて突き除けるやうにしました。

『何と云ふても私は立つ、父さんへ不孝、お三さんへも不義理、お

前も嘸怨むであらうが、但馬屋の御恩も忘れられぬ』

十一から仕込まれた但馬屋の恩もあつたが、それよりも清十郎にはお夏が忘れられなかつたのであつた。匆々に仕度を済めて鞋の紐を結びかけた時、時を出たばかりの鶏がク、ク、と啼いて、急しさうな足音が牛駄屋の角を曲つた。

『父さんには暇をすまい、お三さん、此上とも父さんのことを』

流石に胸が迫つて後は口へ出なかつた、納戸の方へ向いて、心で永の暇を告げて居ると、足音が段々近寄つて、入口から三人入つて来た、一人は名主で二人は同心の衆であつた。

『清十郎は内か』

名主がまづ恚う云つて訊いた。同心は二人とも怪しげに屋の内を見廻して居た。

三人が入口を入る處を、お三もお俊も見ても何事かと胸を騒がせて居た、名主の聲を聞くともう顔の色まで變つて、おどくしなから清十郎の側へ寄つた。

『兄さん、名主が見えた』

清十郎は何心なく名主の方を向いた、何年か見ぬ人ではあつたが知らぬ仲でもなかつた。

『これは名主さままでございますか』

『おう、其方は清十郎、容易ならんことが出来た』

容易ならぬ事と聽いて清十郎の顔色も變つた、悪事をした覚えはないが、姫路へ立つ時刻の遅れることを心配したからで。

けれどお三やお俊は爾は思えなかつた、出立を急ぐ兄や戀人は、お夏への心中立てをする外に親の家に落ち付いて居れぬ理由——同

心の手にかゝらねばならぬ忌はしいこと——でもあつたのではあるまいか……爾思ふと清十郎の顔色の變つたのが何よりも氣になつた

「兄さん」

「清さん」

お三とお俊が左右から取籠つた、同心は屹度身構へて清十郎の前後を取巻いて居た。

三〇

「容易ならぬ事とは？」

清十郎は聲まで慄はせて訊いた。名主は氣の毒さうに、

「其方に泥棒の嫌疑がかゝつて居る」

「な、何と被仰います、私に、泥棒の嫌疑が？」

「正直者の其方に斯様なことはあるまいと思ふが、係り合せたが災難、一應お取調べを受けたが好からう」

「へい、受けます、何、身に暗いことさへなければ、少しも怖ろしいことはございません、急ぎの身ですから、何うか、成るだけ早くお願ひいたします」

清十郎は二人の女を振り切るやうにして同心の前へ進み出た。

「お取調べを受けます、何か紛失物でもあるのでございますか」

同心はまづ人相から見て、

「其方は飾磨から船に乗つた喃」

「へい、明神丸といふ便船に乗つて、大阪の川口へ着いて、それか

「ら徒歩で歸つて参りました」

「其節、京の糸屋孫右衛門と懇意に相成つたであらう」

「何といふ人か名前は存じませんが、京の糸屋さんとは隣合せに乗合ひましたので、色々無駄咄をいたしました」

「其糸屋が船中で金子五十兩紛失した」

「その五十兩の金を私が盗んだとでも被仰るのでございますか」

清十郎は怨のしさうに云つた。

「盗んだとは本人も云はぬ、なれど、隣合せた誼に狎えて、厠へ立つ都度、手行李を其方に預けたと申すが」

「へい、慥かに預りました」

「其手行李の底に小判五十兩入れてあつた、其小判が一枚残らず紛失したとの届出ぢや、差向け其方に嫌疑のかゝるは止むを得ん、

身に黒みがなくば證明は立たう、一應身柄を調べる、神妙にいたさうぞ」

終の一句は犯し難いほど森嚴な調子であつた。清十郎は思はず身内を慄はせた。

折角整えた身仕度が端から解かれて行つた、お三もお俊も何うなることかとおろ／＼して居た。

やがて、胴巻から重い帛紗包が取出された時、

「あッ、それは」

清十郎は慌て、取戻さうとした、一人が其手を支えて、一人が敏捷く包を解いた、中には小判が七十枚山吹色に輝いて居た。

同心の眼は怪しく光つた、お三もお俊も太胸を突き、名主までが怪疑の眼を睨つた。

「それは、た、大切な……」

お夏から預つた七十兩の小判であつた、清十郎は取り戻さうと焦つた、焦れば躁るだけ同心の疑念を強めさせて、清十郎は思ひも染めぬ災難を購つたのであつた。

「清十郎、神妙にしませい」

同心が一喝した頃には、もう清十郎に捕縛が打たれて居た。

五十兩と七十兩である、無論金高には相違があつたが、同じ山吹色の小判といふのが、疑心に駈られた同心に動かぬ證據であるかの

やうに思はせた。

「そ、その小判は……」

清十郎は小判の出所を明かにしやうと焦つた、けれど同心には出所の如何は問題でなかつた。公儀の命を受けて、大阪から態々水間へ出張つた身は、聊かでも疑惑の點を認めたら捕縛を打つて代官所へ引立てるべしであつた、出所の糺問は代官所の役向である、何でも彼でも引立てさへすれば、同心の能事足れりと思つて居た。

「申し開きは白洲でしませい」

情なく云ひ切つて同心は清十郎を引立てやうとした、七十兩の小判は服紗包のまゝ、一人の同心に懐中されて居た。

「兄さん、お前は……」

繩目にかゝつた清十郎に犄と取縋つて、お俊は怨み泣きに泣いた

お三も眼を泣き腫せながら最愛さうに泣き絶つて居た。

「事もあらうに盗みをして、縄目にかゝつて村を立たうとは、兄さん、聞えぬ、聞えぬ……」

「私は、父さんが最愛うござんす」

右と左でお三とお俊が泣き口説いた、清十郎は盗みをした覚えのないことを、お三やお俊に云ひ聞かせたくも、但馬屋へ往ぬる時刻の遅れること、今日が日も知れぬ父親のこと、何や彼が胸一杯になつて、思ふやうに口も利けなかつた。

「こ、この金は、お、お夏……」

それさへお三の手前を兼ねて判然とは云ひ得なかつた、災難とは云へ身に覚えのないことで、病父へは不孝、但馬屋へは不義理、妹やお三にまで疑はれるかと思ふも胸が掻き裂きたいほどに思えた、

待ち焦れて居るお夏のことまで思ひ出して、清十郎は男泣きに聲を立て、泣いた。

お三も泣いた、お俊も泣いた、納戸でも佐治右衛門が泣いて居た「黒みがなくなれば明も立たう、黒白は審判の上ぢや、立ちませい」

同心が捕縄の端を取つて追ひ立てた、愁嘆場は容易では幕になりさうもなかつたので、同心が女二人を隔て、清十郎を表口から引ツ立てた。

「兄さん……」

「清さん……」

名残の盡きぬ哀しい聲が、追ひ立てられる清十郎の胸を抉つた。

「父さんを頼む……」

振り回つて唯これだけ云ふ間も、涙が止め度なく頬を流れた。や

二只
がて、牛駄屋の角を曲つて、川添ひの往來を下手へ下ると、春戸口
からお三とお俊が延び上り延び上り見送つて居た。病人を控えた悲
しさは、思ひ切つて後も尾けられなかつた。

「兄さん」

「清さん」

静な村の朝を哀しい聲が何時までも續いた、見回り見回り追はれ
て行く清十郎の姿が、川下の土橋を小さく越えて、松並木の蔭に消
えて見えなくなると、お三とお俊は顔見合つてわつと泣いた。

身動きもならぬ筈の佐治右衛門まで、親子の名残惜しさに納戸の
入口まで匍ひ出して居た。

「父さん、お前はまあ」

二女が慌て、駆け寄つた頃には、佐治右衛門はもう此世の人では

なかつた。

冷たい遺骸に取付いてお俊もお三も聲を限りに泣いた。

お三の實家から父親の庄兵衛が駆け付けて來た頃には、清十郎の
繩目にかゝつた噂が村一杯に擴がつて居た。

まだ日の出間際ではあつたが、田舎だけに何家も彼家も朝は早か
つた、或者は畑の中から、同心に追立てられて行く清十郎を見た
云ひ、或者は水車場から、土橋を渡る清十郎を見たと言つた。見た
者の口から見ぬ者の耳へ、見ぬ者の口から更に見ぬ者の耳へ吹聴さ

れた、其都度噂は噂を生み、想像に想像を加えて、庄兵衛の耳へ入つた頃には清十郎は人殺しの大罪人であるかのやうに誇張されて居た。

「清十郎が人殺しをしたツ？」

庄兵衛が目色を変えて聞くと、親切に知らせに來た男は恁う云つて告げた。

『されば、されば、噂ちやで確とは云へんが、何でも村の衆の云ふことには、清十郎どのは評判の男前、その男前に遊女が惚れて、とうや／＼二世を契るやうな深い仲になつたげな、ところがお定りの金に詰つて、逢ひたうはある、金はなし、そこでツイ魔が魅して、清十郎どのは飾磨通ひの船の中で、大阪の客人の金を盗んだ上に其男を海へ投げ込んで、其足で親仕どのへ暇乞ひに戻つて、』

これから遊女と心中する意で今朝早う立たうとした處を、追手の捕手に召捕られてそれで繩付になつたのぢやげな、可哀想なはお前とこのお三さん、足かけ三年も辛抱して、揚句の果が祝言どころか、焦れた男を繩付にしてのけやうとは、よく／＼不慥に生れた人ぢやと村では今専らの噂ちや、娘ごゝろの思ひ詰めて、へよんな氣を出すまいものでもない、親の役目ぢや早よ行つて見てやらつしやい』

と云ふのであつた。庄兵衛は無論其れを眞實とは思つて居なかつた、戀には眼が眩むとは云へ、清十郎が人殺しをして金を盗む……そんなことのあらう筈がないと思つた、けれど昨夜戻つたことは事實でなければならなかつた、それは種吉を迎ひに遣つたことを知つて居たから、今朝繩付きで引かれたことも、何うやら嘘ではなさ、

うに思おもえた、名主なぬしが役人やくにんを連れて通とほるところを見みた者が近きんじよ處じよに三四人もあつた。噂うはさを十分ぶ分に聞きいても何かあつたことは容易よういに信しんせられた、殊ことに佐治右衛門さぢゑもんの大病たいべうで昨夜ゆふべから見舞みまひ旁々かたぐ、お三おさんの顔見かほみに行ゆく心積こころづもりでもあつた、何なにや彼かを兼ねかねて内うちを出でたのであつたが、途と中ちゆうから妙めうに胸騒むねざはぎがし初はじめて、何なにうにも彼かうにも走はしらずには居ゐられなかつた。

『お三、皆無事みなぶじか』

表口おもてぐちから飛び込こんで見みると、お三とお俊しゆんが佐治右衛門さぢゑもんの死骸しがいに取とり付ついて途方とほうに暮くれて居ゐるところであつた。

『父ちちさん、何なにうしやう、何なにうしやう』

娘むすめのお三おさんに泣なき付つかれた時とき、庄兵衛せうべゑは胸騒むねざはぎのした理わけ由ゆが初はじめて分わかつたと思おもつた。

『何なにうも斯かうも、こりや大事だいじぢや』

庄兵衛せうべゑまでが一時途方とほうに暮くれたほどであつた。

見舞客みまひやくや、悔くやみ客きやくがドシ〜押おしかけて來きた、種吉たねきちも來き合あはせて居ゐた。

佐治右衛門さぢゑもんの弔こむらひを濟すますまでに種吉たねきちを二度ふたまで大阪おほさかへ遣やつて見みたが、何なにう頼たのんで見みても清十郎せいじうらうには會あえないと云いつて戻もどつて來きた、清十郎せいじうらうが假牢舍かりうやに入いれられて居ゐることは種吉たねきちの口吻くちぶりで好よく分わかつた。灰葬かいそうが濟すんで、一週忌しうきが過すぎて、十日目かみが來きても清十郎せいじうらうは仍やう且り牢らう

舎に繋がれて居るらしかつた、お三もお俊も落膽して、二日も三日も寝てばかり居た。

庄兵衛はお三やお俊の口から清十郎のことは委しく聞いて但馬屋のお夏とは好い仲のやうにも思えたが、お三とは立派に夫婦杯をした仲であつた。お三が諦めて了へば兎も角、さもない上は世間体だけれども清十郎は庄兵衛の聲であつた。其聲が假にも牢舎へ繋がれて居るのである、世間がお三や自分までを善く云はぬことは庄兵衛は好く知つて居た。それも清十郎が悪人とか、手癖の悪い男とかいふのならば、随分人殺しをして金を盗む位なことはやり兼ねまいものでもないが、正直で、憶病で、人の善い男であることは庄兵衛は清十郎が子供の時から好く知つて居た、引かれて行つたといふのも船中で金の紛失した爲めの嫌疑である、七十兩といふ小判を持つて

居た爲めに引かれて行つたのである、それを人殺しの、やれ盗人のと村の者から悪口されることはお三やお俊以上に庄兵衛は残念に思つた。

『お三さんも物好きな、好き好んで盗人の女房にならずものことぢや』

だの、

『庄兵衛どのも仕合せ者ぢや、人殺しの聲持つてな』

だの、寄ると障ると恚那ことを村中の者が云ひ合つた、そして、清十郎が今にも打ち首か、磔刑にされるやうなことで眞實しやかに云ひ振らして居た。男前で娘たちに評判された清十郎のことだけに、這度は若い男の口から清十郎の悪口雑言が敵討でもするやうに女の耳へ吹き込まれた。

「あなたも人殺しの女房になつたら何うや、磔刑にされても清十郎は男前やで」

とか、

「盗人でも構はんやないか、男振さへ好かつたらな」

とか、そんなことを云つては清十郎に岡惚れをして居た娘たちを擲擲つて居た。それやこれやがお三やお俊の耳へ入るたびに二女は悶え泣きに泣いた。庄兵衛が決心を定めて大阪へ出かけて行つたのは、清十郎の罪科の模様を聞くための外に、お三やお俊の嘆きを見るに見兼ねたからであつた。

「無罪で出て呉れでもしたら、お三と手を繋がせて村中を軒別にお禮廻りをさせてやる、何處に磔刑になつたか、あることないこと云ひふらした奴の面の皮を叩き潰してやるのぢや」

心で聲の無罪を祈りながら、庄兵衛は大阪へ出かけたのであつた

三五

清十郎は大阪の假牢舎の中で死んだやうな日を送つて居た。

但馬屋の店の多忙いことを氣にして居る清十郎は一刻も早く嫌疑を晴して貰ひたかつた、水間から紀州藩へ引かれるのは違つて、大阪へ引かれることは幾分氣の安まるどころもあつた、姫路へ往ぬには何うでも大阪へ出なければならなかつたからで。其晩白洲へ出て、七十兩の出所を申し立てたら遅くも翌日の船へは乗れて、一日遅れても五日目には但馬屋へ飯れると思つた、ところが大阪へ着い

て見ると其晩は時刻外といふので假牢舎へ打ち込まれ、翌日は強盜の調べがあつたので清十郎の方へは手が廻らなかつた。其翌日も、其翌々日も、恰ど三日三晩、何のお取調べもなしに過ぎた。其の三日は清十郎には三年も三十年も待たされたやうに長かつた。四日目の約束が五日目になり、六日目になり、七日目になつても但馬屋へは往ねさうにないと思つた時、寧ろ首を縊つて死なうとまで思つた。帯を解いて、思ひ切り首を締めたら死ねぬこともあるまいと思つた、けれど其れでは但馬屋の旦那へ申譯の自殺と思はれるよりも、悪事を働いた悔悟の自殺と間違えられる方が勝つて居た、死んだ後まで泥棒の汚名を被るのは辛いよりも馬鹿々々しかつた、死ぬなら一ト目でもお夏に逢ふて、之々の譯で死なねばならぬ、あなたは生永らえて幸福に一生を終つて呉れ、心があるなら香華の一

つでも手向けて呉れ、それで私は成佛する……暇乞ひの口上も述べて死にたかつた、父親のこと、お俊のこと、お三のことも念に残つた。

『も少し待つて見やう』

考え直して待つたもの、もう三日目頃から生きて居るやうな顔色でなかつた。

白洲へ引き出されて、菰の上で兩手を支いて居ると役人が服紗包の小判を證據に嚴な調子でお取調べを初めた。

清十郎は其小判をお夏から預つたと云つて善いか悪いか、鳥渡判斷にまごついた、けれど云はなければ自分の明が立たずに何時までも牢舎に繋がれなければならなかつた。

『それはお夏から預つたものい相違ございません』

と正直に申立てると、這度は其お夏といふ者の詮議が初まつた、何者の娘であるか、娘の身で七十兩といふ大金は何として所持して居つたか、其大金を何が故に其方へ預けたか。

清十郎は何も彼も白上して了つた。すると役人は屹として、

『奉公人の身で主人の娘を弄ぶ不届者ツ』

とお叱りを受けた、清十郎は『はーッ』と思はず額を洲へ摺り付けた。此戀愛關係が役人に宜しからぬ印象を與へた。道ならぬ戀をするやうな人間であれば、盗みはしかねまじい者と睨まれたらしかつた。

其日はそれだけで済んで、翌日白洲へ引かれた時は、役人の態度がころつと變つて居た。

『清十郎とやら、身の明は立つたぞ』

役人は優しい聲で恚う云つた、清十郎は眞實とは思えなかつた、恚う云つて乗せて置いて、何か調べ直す意であらうと思つて居ると役人は同じ優しい調子で盗みの嫌疑の晴れたことを云ひ渡した、それは京の糸屋孫兵衛の思ひ違ひで、五十兩の大金を胴巻へも付けず手行李の底へ入れて置いたのは道中で悪者に尾けられない手段であつたが、あまり大事を踏み過ぎてそれでも得心がゆかず、更に飛脚宿へ頼んで京へ送らせたことを忘れて狼狽した結果であつたことが知れたからである。

『それでは、盗みの嫌疑は晴れましたのでございますか』

清十郎は夢ではないかと思ふほど悦んで三度も四度も額を砂につけたが、役人は其ま、赦免するとは云はなかつた。

『七十兩の出所を取調べる間、神妙に相待つやう』

憊う云ひ渡されてまた牢舎へ連れ込まれた。
清十郎は更に四五日を薄暗い板の間で暮さなければならなかつた。

三六

盗みの嫌疑が晴れてから更に七日目に、清十郎は漸と白洲へ引き出された。白洲には橋本屋吉兵衛が呼び出されてゐた。

二人は警と顔を見合せただけで口一つ利けるのではなかつた、白洲の森嚴を無視して、假し二人が名乗り合つたところで、仍且口は利けなかつたらうと思はれるほど吉兵衛も清十郎も胸を一杯にして

居た。萬感に打たれて清十郎がハラ／＼と涙を零すと、吉兵衛は顔を反向けて涕を啜つた、僅かの間に見る影もなく窶れ果てた清十郎の姿より、罪なくして圜圖の人となつた心根を不惑に思つたからであつた。

吉兵衛のお調べはもう済んで居たと見えて、役人は直ぐに清十郎へ赦免を言ひ渡した。

「七十兩の金は吉兵衛に下げ渡す、吉兵衛から、更にお夏へ返すやう」

云つて小判は帛紗包のまゝ、吉兵衛に渡された。吉兵衛は畏つて其金と清十郎を受取つて白洲を退つた。役所の門を出てから二人は初めて口を利いた。

「清さん、えらい災難でしたなア」

清十郎は嬉し泣きに泣いて居た。

「吉兵衛さん、御恩は忘れません」

「恩も糸瓜もないが、えらいこつたしたなア」

「面目なうて、世間へ顔が出せません」

「そないなことがおまつかいな、人の物を盗んだといふではなし、

災難いふことは誰にかておますがな、私はまた何ないなことがと

思ふてな」

吉兵衛は今日までの心配であつたことを微細に語つて聞かせた。

京の糸屋の孫兵衛が橋本屋へ訪ねて来たのは、清十郎が其家を出

てから間もない頃であつた、船から上つて川口で別れた時、慥かに

此家へ入つたのを見届けたといふ口上であつた、吉兵衛は何の氣な

しに其人から云々の人間だと、清十郎の在所のことまで語つて聞か

せると其れから二刻も経つて同心の衆が出て来た、それでもまだ清十郎に災難のか、つて居ることは知らなかつた。

今朝、役所から呼出が来て、白洲でお夏さんのことから清十郎の

平日の素行のことを聞かれて初めてソレと知つたのであつたと云つ

た。

「聞いて見れば屁のやうなことやおまへんかいな、京の糸屋とかい

ふ人間も怪體な男や、間違ひかてあんまりや、でもまあ十何日

濟んだのはあなたの運が好いのや、何でもないことで五年も十年

も牢舎へ打ち込まれた人もおますさかいな、何方かといふとまだ

悦ばんならん方や」

さう聞けば清十郎も諦めのつかんでもなかつた、暗い窮屈な牢舎

から明るい自由な世の中へ出たことを思ふと、籠から放された鳥の

やうな歡喜も胸に湧いて、好く首を縊らなかつたことだと、牢舎の
中で死を決した時のことが怖いやうにも思はれた。

『お蔭さまです』

理由もなくお禮が口へ出た。

吉兵衛の厚意で川口の橋本屋へ同道されて、一ト風呂浴びて、生
れ變つたやうな氣分で、二階の一ト間に座つて居た清十郎は何より
も先に但馬屋のことが氣になつた。

四日といふ期日どころか、多忙い買ひ込みの時期まで過ぎてもう

賈にかゝらねばならぬ頃である、主人の九左衛門が夜食の時、晩酌
の力でお夏にまで當つて居る様子が目前に見るやうに思える、何う
云つて往んだものか辯疏の口上が清十郎には何うしても案に付かな
かつた、盜棒の嫌疑で獄舎に繋がれて居たとはお夏の手前だけでも
云へなかつた。假し、口上が出来ても、それで九左衛門の立腹が溶
けるか何うか、問題である。

『もう但馬屋から暇になつて居るかも知れぬ』と思ふと、お夏のこ
とが遣る瀬ないほど氣になつた。

細付で引かれて出た水間のこと、今日明日の知れなかつた父親の
こと、お三のこと、お俊のこと……それを思ふと水間へも足踏みは
出来ない。

『寧ろ、死んで了ふか』

二階の欄杆に凭れて川の流水を見込んだことも一二度はあつた、けれど其都度思ひ出すのはお夏のことであつた、待ち焦れて居やうと思ふと、一ト目逢はずには死ぬ氣になれなかつた。

「清十郎さん、水間から庄兵衛さんといふ人が来やりました」
橋本屋の家内が梯子口から恚う云つて知らせたのは、其翌朝であつた。吉兵衛の勸告で其日は飾磨行の便船へ乗つて、但馬屋へ詫をを入れることに大略決心を定めて居たところであつた。

「庄兵衛さんが？」

清十郎は吃驚して居た、其間に階下で何う挨拶をしたものか、

「何うぞお上んなはつてお呉れやす」

といふ吉兵衛の聲がして、庄兵衛の頭がもう梯子口から覗いて居た。

「清さん、無事に出られて芽出度い、これほど嬉しいことは私は四

十九年以來ぢや、好う出て呉れた、私は嬉しい」

階段を上りながら庄兵衛は勝ち誇つたやうに云つた、水間を立つ時のことを思ふと、全く夢のやうに嬉しかつた。

「色々心配をかけて済みません」

清十郎は面目なささうに云つた。

「なあに、災難ぢや、私は噂を聞いた時からそんな阿房げたことがあるかと思ふて居つた、人を殺して金を奪るの、遊女に迷ふて盗みをしたの」

「誰が、誰が庄兵衛さん」

「それに色々世間の奴は云ひたがるものでな、やれ〜まあ是れで私も壽命が延びた、お三もお俊さんも悦ぶことぢやる、あれ

「からお前佐治右衛門は……」
清十郎が屹と面を擡げた。

「父さんが何うかしましたか」

清十郎はもう顔の色まで變へて居た。豫め覺悟をして居たことではあつたが、さて様子を聞くまでは胸の鼓動が苦しいほど高まつた。

勝ち誇つたやうな庄兵衛の様子ががらりと變つて、正面には清十郎の顔を得見なかつた。

「佐治右衛門は遂と佛になつた」

「何時？、何日庄兵衛さん」

「お前が括られて出て間もなしぢや」

「私が括られて間もなく……」

清十郎は怵え切れずに兩掌を顔に當てた、「それから私を盗人のやうに思つて……、何うして安心させやう、明りが立つても見て貰ふことも、聞いて貰ふことも……」

庄兵衛までツイ貰ひ泣をして、

「清さん、これも氣休めの爲めぢや、責て卒塔婆へでも明の立つたことを知らせてあげて呉れ、死んで四十九日までは軒端を去らんといふから、佛もそれを待ち兼ねて居やうぞい、喃清さん、序にお俊さんやお三にも無事な顔を見せてやつて呉れ、二人女とも死

んだやうになつて居る、可哀想と思ふてな」

清十郎もそれは爾したかつた、けれど但馬屋の方も氣になる。

「私も爾したいとは思ひますが……」

「何うでも恚うでも爾いふことにして貰はんことには、お俊さんも

お三も水間には住んで居れん、私も村へ顔が合せん」

庄兵衛は村の評判を逐一語つて、

「此ま、姫路へ行つて呉れたら村の奴らは其れこそ碌なことは云ふ

まい、後暗いことがあるから村へは戻れまいの、出獄といふのは

嘘で、まだ牢舎に煤ぶつて居るの、何彼と難癖をつけるに定つて

居る、それでは佛へも濟むまいし、第一お俊さんやお三が可哀想

ぢや、此處は何うでも私と一緒に水間へ戻つて呉れ、直ぐに引返

す分にも一應水間へ顔出をして貰はんことには、私は此處を動か

んで爾思ふて呉れ」

庄兵衛は腕を張つて、大磐石でも据えたやうに力んで居た。清十

郎はまた決心が鈍つた。

橋本屋吉兵衛の仲裁で清十郎は一應水間へ戻ることに決つた。

今突然但馬屋へ往んで、本人から託言を入れるよりも何うせ一度

は吉兵衛も但馬屋へ行かなければならん私用もあつた、殊にお夏へ

返すべき七十兩の小判を公儀の役人から依頼されて居る、それや是

れやを兼ねて久振りに但馬屋の九左衛門に逢ふて、事の成行から詳

しく物語つた上で詫びを入れて、改めて水間へ報知せる、恚うなつた上は五日や十日のことはないから、佛へも香華を供え、家の後始末もつけて、改めて姫路へ出かけた方が好からうといふのであつた。

『そのこと、そのこと』

庄兵衛は膝を打つて賛成した、清十郎も唐突に一人で姫路へ往ぬのも足が重かつた。

『では成だけ早くお願いします』

『宜しおます、四五日内には必ず知らせます』

それで約束が決つて清十郎は庄兵衛に連れられて水間へ戻つた、佐治左衛門の佛になつて居たことは涙の種ではあつたが、冤罪といふことが判明して無事に出獄して戻つて来たことは、お俊にもお三

にも警え難ない喜びであつた。

『正直でさへあつたら、濡れ衣は乾きますわいな』

お俊は甲乙なしに爾云つて兄の冤罪であつたことを辯明した、庄兵衛はまた庄兵衛で、村内を残らず布令廻つた。

『災難は何處から誰に降つて来るか知れんでお互に好い加減なことは云はんものぢや、人殺しをしたものが許されさうな筈もなし、磔刑にされる者が戻つても来られまい』

『そして清十郎さんは戻られましたか』

浮と誰か訊かうものなら、それこそ庄兵衛は敵にでも出會したやうな相恰をした。

『戻つたか戻らんか顔でも拜んで来るが好い、正直者の清十郎を何彼と難癖を付けやがつて、庄兵衛の聲を爾那ものと思ふかッ』

誰彼の見塚なしに喰つてかゝつた。括られた噂はぼつたり止んで清十郎はまた元の男前で通るやうになつた。お三も這度は眞實に嬉しい身の上となつた。

三日、四日、五日と吉兵衛からの便を待つ間に、清十郎とお三の詞使ひが變つて來た。

『お三』と清十郎が呼び捨てにすると、お三も清十郎を『清さん』とは云はなかつた。『もし』とか『あんた』とか、呼び憎さうに低い聲で呼んだ。お俊から『お三さん兄さんは』と訊かれて、何うかすると顔を赤らめるやうになつて居た。

とは云へ、清十郎はお夏のことを忘れたのではなかつた、戀しい姫路の天を眺めて、泣きたいやうな氣持になることは日に幾度あるか知れなかつた。

吉兵衛からの便が今日か明日かと待たれた。



吉兵衛は清十郎を水間へ歸した翌日か、翌々日には但馬屋へ訪ねて行く心意であつた、ところが折悪く阿波から客があつて、手を抜くに抜けない破目となつて、遂とう四五日潰して了つた。

いよいよ明日は姫路へ渡らうといふ日のお晝時分に、飾磨から米船が着いて、店へ訪ねて來たものを見ると其れは但馬屋の勘十郎であつた。

『いよう、これは〜』

吉兵衛は如才なく奥座敷へ通して、

「實は明日但馬屋さんへ出かけて行かう思ふて居ましたんや、好いところへ来て呉れはりました」

「何ぞ急用でも出来ましたのか」

「いろく復雜た咄もおますが、それは晩のことにしてまあ何うぞ御ゆつくり、そして今年はおんたさんでやすな」

「清十郎がすつぽかしたのでお鉢が私へ廻りました、彼奴正直さうな顔して居ても仕方ない奴でしてな」

「勘十郎は何彼につけて清十郎のことが悪く云ひたかつた、吉兵衛は以前から勘十郎が清十郎を目の敵にして居ることを知つて居た。此奴は浮と打明け咄は出来んと思ひながら。」

「まあく、咄は晩にゆつくり聞くとして、何うであす風呂は」

手を打つて風呂へ案内させて、吉兵衛は店の方へ出て行つた。後

で女房のお淺が二階の客間へ勘十郎の手荷物など運ばせて居ると、茶道具を持つた女中が湯上りの勘十郎を二階へ案内して来た。

「また三四日逗留させて貰ひます」

勘十郎が濡手拭を欄へ廣げながらいふと、お淺はお茶など入れて「何うぞ逗留してお呉れやす、去年は清十郎さんだしたなア、あん

たはんは暫く目だしたよつて、つい度忘れして居りました」

「今年からずつと私が來ますから何分よろしう」

「そして清十郎さんは？」

「あんな奴はもう疾の昔に暇になりました」

「へーえ、清十郎さんはもう暇になりましたか、明日良人が但馬屋さんへ行かう思ひましたのは、實は清十郎さんのことだつ

せ、但馬屋さんではえらい立腹だすやろなア』

『清十郎が此處へ来ましたか』

『来て呉れはりました、彼の人もえらい災難でなア』

『清十郎が災難？』

勘十郎は聞き捨てならぬやうな眼付をして其災難の一伍一什を根掘り葉掘りして聞いた、お淺は何心なく皆喋つた。

『原因を云へばお夏さんの七十兩の小判ですが、彼の人も氣の毒な最負の引き倒し見たいなことになるなア、七十兩の大金まで與げはる位だすから、清十郎さんとは疾うから好い仲だすやろかい』

聞く内に勘十郎の眼の色が怪しく光つたが、お淺は少しも氣付かず喋つて居た。

四

後から後から入船があつて、吉兵衛は少しも悠然出来なかつた、無論姫路へ行くことは思ひも染めなかつた。其間に四五日が夢の間に過ぎて、勘十郎へ金の計算をする日が来た。今年は案外の景氣で例年より二割以上の口銭があつた。九左衛門の思はくより八分高に商ひが出来たので、何兩かは勘十郎が胡麻化すべしであつたが腹に一物あるので其れはしなかつた。

芽出度く双方手を打つて、金と證文が交換されて、それから酒が出た、一巡酔が廻ると咄は其れから其れと手繰り出て、やがて清十

郎の噂になると吉兵衛は俄に立ち上つた。

『さうやさうや、浮として七十兩のこと忘れるところやつた』
箆笥から服紗包を取り出して、勘十郎の前へ持つて來は來たが、
其ま、懷中に振ち込んで別な咄で紛らせやうとした。勘十郎はもう
ちやーんと分つて居た。

『其包でせう、清十郎がお夏さんから貰ふたといふのは』

『あんた知つてはりますのか』

『知つて居るところの騒ぎぢやありません、但馬屋で知らんものは
棚の大黒さん位ゐるものでせう、清十郎も牢舎にまで打ち込まれ
て、えらい災難な目に遭ふたものだ、は、は、は、』

『へーえ、牢舎のことまで、早いもんだすなア悪事千里といふがほ
んまに怖いもんや、さうですか、それなら大事なからう、勘さん

頼まれてお呉んなはらんか』

『好うがすとも、其包をお夏さんに渡して受取書を取つて送れば好
いのでせう』

『其通り、その間に私も出かけますが何分お見受け通りな始末で』
『承知しました、清十郎のことも旦那へ好いやうに云ふて置きませ
う』

『是非頼みまつせ、勝手なこと日數が延びたのとは違ふて、何い
ふても災難のことたすさかいな、清さんも可哀さうだす』

『私も朋輩のことですから、充分旦那に願ひして置きます』

『さうして置いてお呉れやす、其間手の隙き次第私がお願ひに出ま
すよつて』

其晩勘十郎は大阪を立つた、船が川口を出る少し前に、知合の男

に何やら状を書かせて、其れを自身で飛脚宿へ持つて行つて素知らぬ顔で船の錨を抜かせた。状の宛は水間の清十郎で、差出人は但馬屋九左衛門としてあつた。

四二

九左衛門の偽状を清十郎が受取つたのは其れから三日も経つた後であつた。

お三もお俊も畑へ出て内には誰も居なかつた、清十郎が裏の小川で鍬を洗つて居る處へ、飛脚が状を持つて來て直ぐに去つた。清十

郎は身内を顫はせながら納戸の椽まで戻つて讀んだ、無論偽状とは思ひも染めなかつた。

前略、家事向の都合に依り、今日限り暇遣はし候間、當方へ歸參の儀屹度御無用の事追て荷物は取纏め送り届け可く、右確と申渡し候 以上

但馬屋九左衛門

清十郎丈江

清十郎はこれを吉兵衛から寄越したものと思つて居た。

『それでは詫言は叶はんのか……』

茫乎と何時までも一つ處を瞞めながら、住み馴れた但馬屋、折角目をかけて貰つた九左衛門、店のこと、朋輩のこと、それからそれと思ひ出すと、深い谷底へ蹴落されて居るやうな氣持がした、底知れぬ暗い谷底へ落ち込みながら、上を見るとお夏が名残惜しさうに岩の上から覗いて居る、派手な振袖を着て、赤い掛物をかけて。二人の距離は段々遠ざかつて行く、もう手も握れぬ、物も云へぬ、一生の別れである、二十町、一里、十里、百里千里と二人の仲が隔たつて行く、もう二度とは逢えない、顔見ること出来ないうやうな哀しい、暗い氣持で清十郎は胸一杯になつて居た。目が何時の間にか曇つて居る。

何度繰返して讀んでも手紙の文言では、種吉と二人で但馬屋を出る一分前までの清十郎には二度と成れさうになかつた、爾思ふと其時までの幸福であつたことが痛切に感じられる、それだけ當時が美ましい。『ま一度彼の頃の清十郎に成つて見たい』

考え直すと、断じて成れないとも限られて居ないやうにも思えるお夏が心變りしたのでもなければ、此ま、死別れをするのでもない同じ世に二人とも生きて、二人とも焦れて居るとすれば、唯清十郎が元々通り但馬屋へ納まりさへすれば好いのであつた、元の清十郎に成れなくとも、お夏と一つ屋の棟に住んでさへ居れば清十郎は幸福であつた、子に甘い九左衛門である、お夏の手から詫びて貰ふ……か。

何にせよ清十郎は沈として居れなかつた。一度吉兵衛にも逢つて

但馬屋の模様も聞きたかつた。

『これから行かう』

清十郎は立ち上つた、若し此ま、姫路へ行くとすると、お三が不
愼であるやうにも思つた。

お俊よりお三がヨリ以上不憚に思えるほど、清十郎はお三に大分
情が出かゝつて居た。

『諦めやうか、行かうか』

行きたいが九分で諦めたいが一分にもせよ、お夏に對する清十郎
の情愛はもう無缺とは云へなかつた。

けれど兎に角、其日の中に清十郎は大阪へ向けて立つた。お三に
もお俊にも、遅くて二日後には戻つて來ると旁々誓つて立つた。實
際其時は清十郎も爾思つたのであつた。

それが一生の永別にならうとはお三もお俊も清十郎も少しも氣付
かなかつた、暗示はある時も無い時もあるものである。

四三

清十郎が川口の橋本屋を訪ねたのは、夜が明けてまだ間もない頃
であつた。襦袢を着た吉兵衛が顔を拭きく出て來て、清十郎を奥
の間へ通した。

『二階はお客さんが居やりますのでな』

云ひくお淺は寢床を片付けて居た、女中が手焙へ火を入れてか
ら清十郎と吉兵衛が差向いた。

『えらい早朝うから、何ないしなはつた』

吉兵衛がお茶を煎れながら訊いた。清十郎は但馬屋からの偽状を出して見せて、

『但馬屋から恚ういふて来ました』

云つて眼まで濡ませて居た、吉兵衛は一應讀んで見て小首を捻つた。

『はてな、こないな筈はおまへんのやがな、實は何だす、此間勘十郎はんが見えましてな』

吉兵衛は店が多忙で姫路へ行けなかつたこと、折よく勘十郎が來合せたので七十兩の小判を托ける序に、清十郎のことも懇々頼んで置いたこと、其間には手が隙くから、但馬屋へ出かけやうと思つて居たことを詳細語つて、

『後から後からお客が切れまへんので、未だに得行きまへんのや、まあ〜心配しなはん、あんたも但馬屋さんには無うてはならん人や、私が頼んだら一も二もおまへん、請合ひま、何やつたら大鼓見たいな判でも捺しときまつせ』

吉兵衛には十二分の自信があつた、清十郎は狎へたいほど嬉しかつた。

『助けると思つてお骨折りを願ひます』

兩手を膝に支いて幾度も頭を下げた。

『助けるも助けんもあらへん、但馬屋はんでは呼び戻したい人、あんたはまた往にたい人、それとこれとを結び付けたら好いのやおまへんかいな、心配しなはん、この状かて但馬屋はんから來たのやおまへんやろ、誰かの悪戯に違ひおまへん』